

芥川だより

発行日***2017年9月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072 - 681 - 8870

梵

***** 一部100円です *****

大峰南奥駈の奇跡・行仙宿山小屋



西は十津川村、東は下北山村の境界線にある行仙岳、その山頂から15分ばかり下った佐田辻に行仙宿山小屋はある。新宮山彦グループが浄財と奉仕活動で1990年に新築し維持管理している山小屋である。40人ほどが泊まれる小屋と行者堂、管理棟が造られている。小屋には、荷揚げされた水が置かれ毛布や枕まで備え付けてある。薪も用意されていてストーブで暖をとることも出来る。夜は発電機による照明があかあかと灯る。まさに至れり尽くせりの無人の山小屋である。

盆休みに私は念願の奥駈道を歩くために、大江君と大峰南奥駈道の偵察に行った時に行仙宿山小屋に2泊させてもらった。その時、たまたま来ておられた新宮山彦グループの人たちと一晩同宿して話を聞きながら皆さんの永年にわたる献身的な努力に驚きと感銘を受けたのである。

車を家から3時間ばかりとばして下北山村から十津川へつながる曲がりくねった国道425号線を走り、白谷トンネルの手前に車を駐車して行仙岳1227メートルに続く急な階段を1時間ばかり登って行仙岳の頂きに立ち、少し下って小屋に着いた。すぐに大江君は水汲みに出かけた。しばらくして汗まみれの女性が背負子に水の入ったタンクを担ぎ小屋に入ってきた。「こんにちは、おひとりですか」「いや、連れが水汲みにいきました。すれ違いませんでしたか」「私は、違う水場で汲んできましたから」と話を交わしながら、私はすごい人だなあと驚いた。10リットル入るポリタンクに満タンの水は重い。水がちゃぶちゃぶ跳ね担ぎにくいというえに山道が急で細くて歩きにくい。

すぐに軒下の蜂の巣を除去されていた男性が入ってこられた。聞けば二人とも、この小屋を管理している新宮山彦グループの会員の方であった。小屋が造られた経緯などを聞くと、新宮の人々が大峰奥駈に並々ならぬ強い想いを持ってボランティアを営々と続けてこられている事を知った。詳しくは、連載「大峰奥駈道」で書いていきたい。行仙宿山小屋は、修験道・大峰奥駈道を再興したい熱い想いの結晶であり、奇跡の小屋だと思えてならない。

死をめぐるあれやこれ(36)

石川 吾郎

偏食(一)

私は幼いころから、肉が食べられなかった。特別、肉食主義というわけでもなく、アレルギーがあったというわけでもなかった。肉になる動物が「かわいそう」という気持ちは多少あったようだが、よく分からない。

この偏食のせいで、小学校ではとくにイヤな思いをした。小学二年の時担任だった女の先生は偏食に対してとくに厳しく、給食を残すのを許さなかった。給食で豚肉や鶏肉の入った料理が出てくると私は食べられなかった。とくに脂身の付いた部分はいくら食べようとしても、口にいれるだけで吐き気が出て飲み込むことはできなかった。その先生は給食を食べられない生徒は、最後まで席を立つことを許さなかった。私は密かに肉片を机の引き出しに隠したり、口の中に無理やり押し込んで後でトイレに駆け込んで吐き出したりしていた。この経験は後々まで私のトラウマになっていた。

また家でたまにすき焼きをして、家族が美味そうに先を争って食べているのに、私だけはすき焼きのどこが美味いかさっぱり分からない、という状態だった。

大人になって私のこの偏食は徐々に改善をしていったが、鶏肉だけはたばら(2ページにつづく)

れないのが続いていた。子どもたちがフ
ライドキーン（それも骨つきの）をおい
しいおいしいと言って喜んで食べている
のは、不思議な感じがしたものだ。しか
しある日、私のこの偏食の原因が、思わ
ぬことから明らかになったのだった。

芥川だより二二八号 目次

ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
みんなで知ろう日本の危機 24	伊藤明	2
素老人☆よもた帳 42	坂本一光	7
哲学屋のつぶやき 38	祖蔵哲	10
おつちよこチョイぼけ 52	A O	12
大峯奥駈道 11	梵店主	13
大人の今昔物語 37	石川吾郎	14
B級サラリーマン渡世譚 50	明石幸次郎	15
オクラの山たより 12	困丁生	17
我がおくのほそ道の旅 9	成瀬和之	21
米国紀行 9	河原林成行	22
翻訳の言葉	大江雉兎	23
孫ウォッチング 21	福田圭	24
埋め草	C	25
編集後記	嘉	25
女90年の軌跡	眞純	26
俳句	土田裕	26
	影山武司	26

みんなで知ろう日本の危機 (24)

隠された支配の構造が存在する「の国

伊藤明

この八月には、注目すべき一冊の小さな本が出版されました。矢部宏治著『知ってはいけない 隠された日本支配の構造』(講談社現代新書) というものです。

この本には、戦後の日本を支配してきたものが何なのか、ということが明確に書かれています。そして驚くべきことに、それは私たち国民のほとんどが知らなかったことなのです。学校でも教えられず、新聞やテレビのニュースなどでも報道されない、日本を支配する日米の密約の数々。しかもこれは単なる陰謀論やウソではなく、資料によって丹念に裏打ちされた事実なのです。そしてこういった事実は、私たち一般国民の目からは隠しつけられてきたのです。私自身もこの本を読んで、大きな衝撃を受けました。

近年、戦後の米国の公文書が公開されるようになり、それを精査することなどにより、戦後日本が置かれた客観的な立ち位置が明かにされてきました。この本はそれを短く、誰にでも分かるように書かれた画期的な本で、文字通り「国民必読」の本だと思います。

幸いこの本の各章の内容を、四コママンガにしたものが、この本にも掲げられ、またネットでも掲載されて、自由に使用してよいということですので、今回はこのマンガをここに紹介して、私なり

第1章 「日本の空は、すべて米軍に支配されている」



の短い要約的なものを付けました。

この内容で、少しでも興味や疑問を感じられましたら、ぜひ実際にこの本を手にとって読んでください。私たちが暮らしているこの日本の社会が置かれた状況私たちが全く知らなかったこの国の隠された仕組み、日本社会の矛盾、疑問に思っても解けなかった疑問の数々についての答えが述べられているのを見いだすことができます。できれば、身近かな方々とも一緒に読んでいただくのがよいと思います。そしてこの上で、この日本という国のあり方を一緒に考えることが必要だと思えます。

以下一章ごとに、私の印象に残った部分を抜き出してご紹介したいと思います。しかしあくまで、この本を実際に読んで頂きたいと思えます。

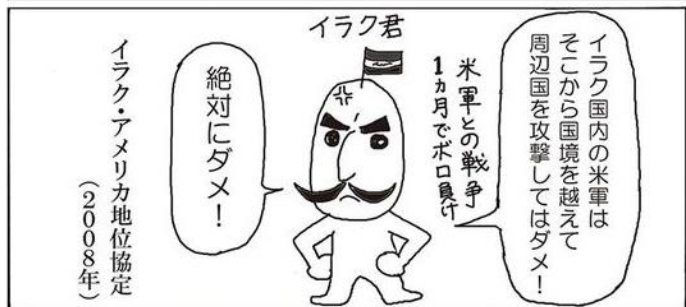
◆第一章 日本の空は、すべて米軍に支配されている

首都圏上空には日本海側までいたる広大な「横田空域」というものがあり、米軍が支配をして日本の飛行機は米軍の許可がなければそこを飛ぶことができない。この空域ならば、米軍はどんな軍事演習をすることも可能で、日本政府から許可をうける必要もない。国内法の根拠はない。これと同様な「岩国空域」というものも存在している。沖縄本島の上空も同様。首都圏上空が他国の軍隊に支配されている。

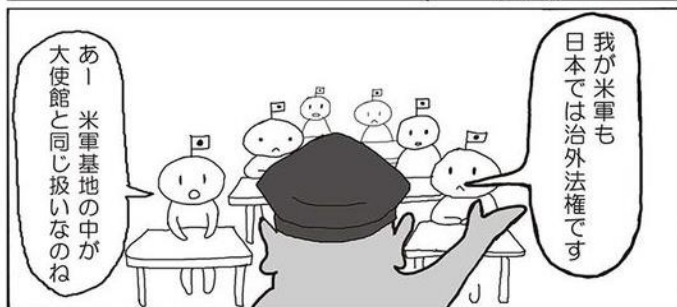
◆第二章 日本の国土は、すべて米軍の治外法権下にある

米軍に支配されているのは、じつは空の上だけではない。沖縄・高江の（オス

第3章「日本に国境はない」



第2章「日本の国土は、すべて米軍の治外法権下にある」



プレイ)ヘリパット建設は、高江の住民や家屋を標的に見立てた軍事訓練を行うためのもの。

実は米軍の軍事演習は日本中で行われている。今後事故の頻発するオスプレイが日本中を飛び回るようになっていく。戦後七十年以上たってもなお、事実上国土全体が米軍に対して治外法権下にあるという事実。

◆第三章 日本に国境はない

米軍とその関係者にとっては(ノーチエックの横田空域から米軍基地に飛来すること)日本は「国境が存在しない国」になっている。また日本は、世界一頻繁に戦争をする米軍に対して、「国内に自由に基地を置く権利」と「そこから飛び立つて、自由に国境を超えて他国を攻撃する権利」を両方与えてしまっている。

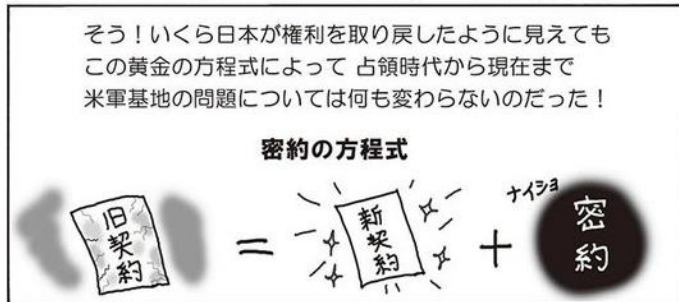
◆第四章 国のトップは米軍十官僚である

日本の憲法よりも、国会よりも上位とされる「日米合同委員会」というものが存在する。「米軍が戦後日本において、占領期の特権をそのまま持ち続けるためのリモコン装置」と表現される。日本人にとつての最大の課題「対米従属」の根幹には、軍事面での法的な従属関係がある。「アメリカへの従属」というより、「米軍への従属」であり、しかもその本質は精神的なものではなく、法的にガッチリと押さえ込まれているもの。

「日米合同委員会」とは、日本国民の目に触れさせたくない取り決めを、すべて密室で処理するために作られたブラックボックスなのだ。

第5章「国家は密約と裏マニュアルで運営する」

第4章「国のトップは「米軍+官僚」である」



◆第五章 国家は密約と裏マニユアルで運営する

米軍のもつ特権は占領期から、①米軍関係者が日本の法律によつて裁かれなないための「裁判権」②米軍が日本の国土全体を自由に使用するための「基地権」があり、現在でも、この状態は変わっていない。一見日米の協定は改善されたかに見えるが、その裏には「密約」があり、米軍の特権は確保されるようになってるのが実情。「日米地位協定」＝「行政協定」＋「密約」の公式がある。これらによつて、米軍関係者が犯罪を犯しても日本で裁判できないし、米軍ヘリが事故を起こしても、日本は調査すらできないのが現状。

◆第六章 政府は憲法にしばられない

安保法制問題とくに話題になった砂川裁判は、在日米軍の違憲性が問われた裁判だが、最高裁田中長官は、判決前にマツカーサー駐日大使に面会し、審判の方針や判決日などの情報を漏洩していた（アメリカの公文書で確認されている）。これは日本の司法の最大の汚点だが、最高裁はいまだに黙殺している。「この情報漏洩の問題にきちんと向き合い、検証・生産できない日本の最高裁は、まだ誕生してから一度も正常に機能したことがない」とさえ、言えるのです」

ここで取られたのが「統治行論」で「安保条約のような重大で高度な政治性をもつ問題については、最高裁は憲法判断をしなくていい」とするもの。

これによつて「安保条約は日本国憲法の上位にある」ことが、最高裁の判例として

第6章「政府は憲法にしばられない」



国民の人権を守るための日本国憲法は、肝心な時にまるで機能しません

なぜっつ...?

第7章「重要な文書は、最初すべて英語で作成する」

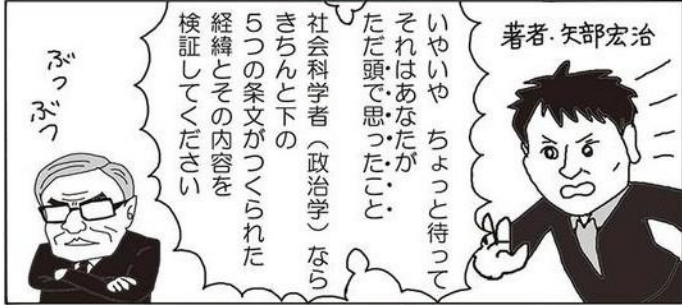


元祖「知の巨人」丸山眞男

これはサンビエールやカントからガンシーに至るまでの恒久平和あるいは非暴力思想の発展の問題であり...云々

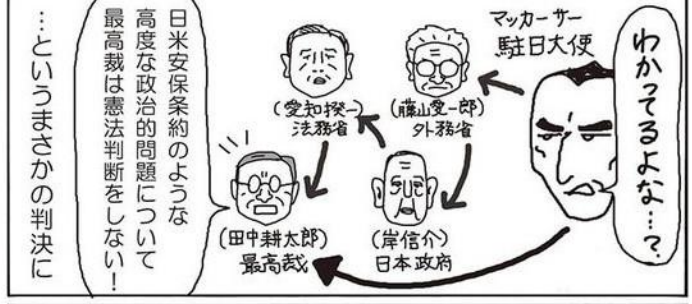


最初 東京地裁では「在日米軍の駐留は憲法9条2項に違反している」という判決が出たものの...

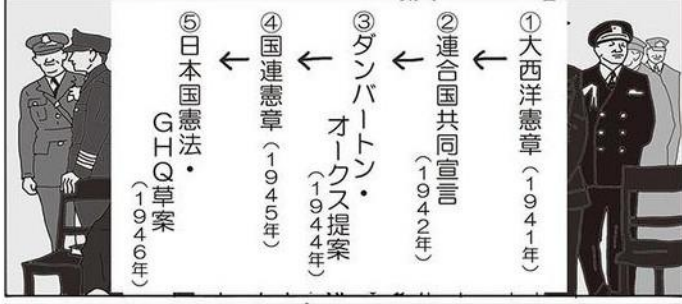


著者・矢部宏治

ぶっつ ぶっつ



日米安保条約のような高度な政治的問題について最高裁は憲法判断をしない! ...というまさかの判決に



- ①大西洋憲章(1941年)
- ②連合国共同宣言(1942年)
- ③ダンバートン・オークス提案(1944年)
- ④国連憲章(1945年)
- ⑤日本国憲法・GHQ草案(1946年)



便利だ...♡

「日米安保条約のような」という曖昧な表現にしたことで以後、米軍だけじゃなく自民党政権や高級官僚もやりたい放題に



沖縄や福島、そして自衛隊の最前線のみならず大きな矛盾のもとで苦しむ被害者をこれ以上出さないために、あくまで事実に基づいた冷静な議論をするときが来ています

て事実上確定してしまった。日本は「法治国家崩壊」状態にある。

◆第七章 重要な文書は、最初すべて英語で作成する

日本国憲法の成立過程を検証する。

◆第八章 自衛隊は米軍の指揮のもとで戦う「指揮権密約」というもの存在。「戦争になったら自衛隊は米軍の指揮のもとで戦う」という密約。朝鮮戦争の時代に作られたこの密約が、現在でも効力をもっている、という驚くべき事実。

日米の間には「日本が占領下で行っていた米軍への戦争協力」を今後もずっと継続するという法的な関係（一九五一年、吉田・アチソン交換公文）が、二十世紀の今も存在している。二〇一五年の安保関連法の制定によって、「完全にアメリカのコントロール下」にあり、戦争が必要と、米軍司令部が判断したら、世界中でその指揮下に入って戦う「自衛隊」が、まさに現実になろうとしている。

◆第九章 アメリカは「国」ではなく、「国連」である

戦後、日米間のあまりに異常で従属的な関係の根底には、「アメリカ＝国連」「米軍＝国連軍」という法的トリックがある。この法的トリックを受け入れると、最終的にアメリカは日本に対して、あらゆる軍事的な支援や兵力を提供させて、それを米軍の指揮のもとに使う法的権利を持っていることになる。これが戦後の日米の軍事関係の詐欺的な基本デザイン。朝鮮戦争時代に作られたこの関係が、今日まで継続していて、これが安倍政権の下で実現しようとしている。

第8章「自衛隊は米軍の指揮のもとで戦う」



第9章「アメリカは「国」ではなく、「国連」である」



◆旅とは何か、人生とは何か、あるいは生きるとはどういうことか

修学旅行に出かける中学生たちを素老人校長はこんな言葉で送り出した。

『皆さんは、いよいよ明日、修学旅行に出発します。旅に出るのです。ところで、旅とは何か。考えたことがありますか。』

私は、ない。だから、考えてみようと思った。旅について考えていたら、大学に、サイクリング部が新入生を歓迎するためにつくった立て看板があった。そこには、「旅が人生なのか、人生が旅なのか」と書いてあった。大向こうをうならせたいと考えた文句のようであるが、旅とは何かがわからなければ、大向こうの新入生の何人が入部してくれるか。心もとなしことだと思った。

それはさておき、旅とは、日常と異なる、非日常的な時空を生きることです。

例えば、松江(仮に)を出発して東京に着くまでの旅。出発すれば、私はもはや松江にいない。かといって、目的地の東京にも着いていない。これは、本当に、非日常的な世界に在ることを意味する。東京に滞在し旅の目的を叶えている間も、ふだん松江で生活しているのとは違う非日常性の世界。松江に帰り着くまでも同様に非日常の世界に在る。出発地も目的地も帰り着く地も確たるものでない、ど

こからともなくいつの間にか始まり、どこへともなく流れて行くような流浪の旅もないとは言わないが、普通の旅には出発地と目的地、そこで達成すべき目的と帰り着く地(一般には出発地)とがある。

さて、旅という時空に在ると、人間は、精神が高揚します。いつも笑ってばかりいる奴が、深々と哲学したり、普段はあたりまえすぎて見過ごしている人や物やさまざまな事象を、まじまじと眺めたり考えたりもする。そういう時空で、人間はずっと賢くなったりするので。だから昔から、『可愛い子には旅をさせろ』と言うのかどうか知りませんが、これが旅の効用です。

ましてや、皆さんはこの旅行のためにいろいろと準備を積み重ねてきました。しかも、行く先は花の都、大東京。自分の目と足で見て歩いて確かめる値打ちがある。たくさんのことを楽しく学んでください。

そのためには、我々が学校の修学旅行団としてお互いに力を合わせたり、一人ひとりがよく注意し、ルールを守り、自分を律したりすることが必要になります。自分たちで計画し、準備したことに従って行動する。それは当然ですが、旅の間も皆さんは多くの人たちに支えられている。それも知ってください。

それでは、皆さん。心して、元気に楽しく、そして無事に、行って帰って来てください。』

ところで、人生が旅に例えられるのはどういうことであろうか。校長の話との関連で言うと、こんな風になるだろうか。

人生の出発地は、私が生まれる前の、生命をもたない物質世界、生命の始まりへの物質世界です。私の人生が終わり、私が帰り着く地は、土に還った世界。その世界は、本質的に出発地と同じ世界で、再び、次の生命の始まりへの物質世界です。生まれる前にあった生命の始まりへの物質世界と、死んだ後に至る次の生命の始まりへの物質世界―繰り返し返しますが、これらは結局のところは同一の物質世界です。この二つの同一の世界の間を生きることが私たちの旅であり、それが人生です。

なるほどそういうことか、とここまで書いてきて、素老人は、はたと膝を打ち、大事なことを忘れていたことに気がついた。旅にたとえた人生の、出発地と帰り着く地はわかった。それでは、人生の目的地はどこか。そこで何をするのか。要するに何をめざした旅なのか、人生を旅にたとえながら、まだそれに答えていないのだ。

人生という旅の目的地と目的は何か。この問いは、人生とは何か、生きるとはどういうことか、あるいは人はなぜ生きるかという問いでもあるだろう。それはまた、時には、人はなぜ生きなければならぬかという抜き差しならない、切羽詰まった問いになることもある。この問

いの答えは何だろうか。自ら問うておきながら無責任なこと甚だしいが、率直に、川柳風に言えば、

人生に答えなど無い問いあふれ

である。さらに突っ込まれると、

ハムレットよそれは答えない問いだとも言うほかないか、と私は思う。

第一に、画家ゴーギャンのタヒチの絵のタイトル『我々はどこから来たのか我々は何者か 我々はどこへ行くのか』(一八九七年)にあるとおり、生きるという旅は人類にとって永遠の問いであるのだ。

第二に、私の人生の目的は斯く斯く然であり、私はこのように生きると言うてみても、その答えは少なくとも(個人、時、場所)の三条件に依存して変化することからはできない。それは、旅の目的地や目的が、(個人、時、場所)の三条件により異なるのと同じである。

さてここで、生きることに関連して思い出したことがある。ただ素老人も老に入り久しい。よもだ帳のどこかにすでに書いたことを繰り返しているかもしれないので、そのときはお許しいただきたい。

○思い出したこと、その一
遠い記憶なので確たるものではない。

それは、戦後の占領下に不可解な事件が次々と起き、後に『日本の黒い霧』(注1)と呼ばれることとなった事件の一つ、松川事件(一九四九年に福島県内の東北本線で起きた列車転覆事件)の裁判を闘ったことでも著名な作家広津和郎が『異邦人』を評した言葉である。『異邦人』といっても彼の死後一九七九年に発売された久保田早紀の楽曲のことではない。フランスの作家アルベール・カミュの小説『異邦人』(一九四二年出版)である。私は一九六七年に大学に入学したが、今にして思えばやがて来る大学紛争の予兆であったか、この主人公が殺人を犯したのは「太陽のせいだ」と公判で呟くことに象徴されるような『不条理』たるものが少なくとも私の周辺では話題となっていて、私もこの小説を読んでみた。結論は、私にはこの小説をどう評すればよいかかわらないということであった。つまり内容は理解しがたいものである。広津和郎の批評を知ったのは、その三十年以上も後のことである。彼の評は今でも私の頭の中には、「ここには人生とは何かという問いはあるが、いかに生きるかという課題意識がない」と記憶されている(注2)。なるほど、そういうことかと思った。人生とは何かを問うことが無意味であるとは思わないが、いかに生きるかを問うことこそが最も重要である(そして実際に人はそのように生きている)という評に、私も賛同する。

○思い出したこと、その二
哲学者鶴見俊輔はその著書『人が生まれる・五人の日本人の肖像』(筑摩書房、一九七二年)のあとがきで、『人間はいつ自分になるか』と問いかけ、自分になるとは『社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決める』ことであり、人間は人と社会との関わりの中で自分になる、そのとき『人が生まれる』と彼の著書の題名の意味を述べている。この本は、この『人が生まれる』視点から書かれた伝記小説の傑作であり、田中正造をはじめとする五人の日本人がどのように生きてどんな仕事をしたか、少年向けに(それは同時に大人向けでもある)紹介した本である。
自分になるということが、人が生まれることである——同様のことをルソーも言っている。『わたしたちは、いわば、二回この世に生まれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために』と(ルソー、『エミール』(中)、岩波文庫、五頁)。
ルソーの言葉を念頭に置いてかどうか、その逆の言葉をドラマで聞いたときはアツと声が出た。『人間は二度死ぬのだ。一度目はその肉体が減んだとき、二度目はその死が忘れられたときだ』——記憶に間違いがなければ、『大仏開眼』という二〇一〇年のNHKドラマで、高橋克典演じる藤原仲麻呂(恵美押勝)が追討され死に臨んだ際に、吉岡秀隆演じる吉備真備に対して発した台詞であった。

人間は、人と社会との関わりの中で自分になり、人として生まれ、生き、そして死ぬ。人が生まれ生き死ぬことは、すべて社会的現象である。
○思い出したこと、その三
大学を辞める前の数年間、私は学生の教育や就職の部門の仕事に関わったことがある。全国からその部門責任書を集めた説明会というか交流研修会のようなものにも何度も参加した。そういう場で、会の趣旨とはちよつと離れたところでハツとする言葉に出合うことがあった(自分でも不思議に思うが、私は、アツと思ったり、ハツとしたりすることが多い人間だ)。就職関係の会でJ.Rの人事担当者の基調講演を聞いていたときである。講師は、比較的若手の女性であった。就職活動のノウハウを言うのではなく、彼女は、『就職を決めるというのは自分の社会的役割を自覚することです。それが難しい。その自覚をどう育てるかはその課題です』と言った。人が生まれる話に共通すると私は思い、『就職とは社会的役割の自覚である』という言葉に出合った。けれども東京まで来た甲斐があったと感じた。

さて、本筋に戻る。人生を旅にたとえるとき、触れないわけにいかないテーマがまだ残っている。先に素老人校長が中学生に言ったように、「旅とは、日常と異なる、非日常的な時空を生きていること」である。しかし人生とは日々生きること、すなわち日常そのものであり、その日常性の中にどんな非日常性があるのか。その問題である。
人生の非日常性とは何を意味するであろうか。人生の日常性を考えるとき、私はそれを端的に詠ったと思える歌『襟裳岬』の一節を思い出す。
襟裳岬
作詞 岡本おさみ
作曲 吉田拓郎
日々の暮らしいやでも
やってくるけど
静かに 笑ってしまおう
いじけることだけが 生きること
だと
飼い馴らしすぎたので
身構えながら話すなんて
ああ おくびよう なんだよね
いやでもやって来る日々の日常性を歌いながら、しかしこの歌は同時に、小さい声でもしれぬが、静かに笑ってしまおうと言っている。日々の暮らしを静かに笑ったり、身構えながら話したりするのは日常を超える行為であり、その瞬間に人生は非日常の時空に入るのかもしれない。そんな風に思える。人生を旅にたとえる意味を示唆するものがこのあたりにありそうである。
人生という旅は、確かに、命の始まり

の物質世界から、命の終わりの（それはまた次の命の始まりの）物質世界への道程であるが、この旅の非日常性は日常性の中に生まれ来るものなのだ。もちろんそれは、自動的に、自然に生まれ来るのではない。またこの非日常性は、それが非日常性である限り、永続するものでもない。

人生が旅であるとは、一つの意識、一つの自覚である。『旅の途上』と書いて「たびのとじよう」と読む河島英五の歌もその自覚を詠っている。

旅の途上

作詞・作曲 河島英五

春はあざやか 菜の花畑で
雲などがめコップ酒
夏は星降る 浜辺に手まくら
波を相手に 旅の酒
:
秋はすれちがう うしろすがたに
想いを残し 手酌酒
冬は暮れゆく 空の彼方よ
鳥は南へ 俺は北へ
あこがれ求め さまよう胸の
燃える想いを 伝えん
たどり着くやら 着けぬやら
人生 旅の途上
:
:

私は、『素老人☆よもだ帳(36)』(『芥川だより一二二号』に掲載)で、『お前らは、

骨の髄まで、ありきたりだ』と、やがて死ぬ男が平凡な一家を罵倒する、山田太一脚本のテレビドラマ『早春スケッチブック』のことを紹介した。そこには同じ男のこんなセリフもあったのである。山崎 努が演じる男のセリフだけを見てみる。

『興味を持って、とお母さん(この男のかつての恋人、素老人注)は私にいつているんだ。家をどうやって手に入れたか、金はどうしたか、学校の合格発表はどうなっているか。そういうことを細々と心配して行くことが、生活して行くことだ、とお母さんはいつている。子供を育てるということ、そういうことだ。ありきたりだろうとなんだらうと、三度三度の飯をつくり、金を算え、掃除をし、着るもの心配をしていかなきゃあ、子供なんて育つもんじやない。そうお母さんはいつている。こんなところで、自分ひとりのことだけを考え、並の人間とはちがうようなつもりでいる私に、子供を育てて生きて行くということ、こういうことだ、といっているんだよ。ありきたりがなにが悪い？ 無数のありきたりに耐えなければ、子供なんて育てられない。生活というものは、平凡でありきたりなものだ。それを批評する資格なんて、あんた(自分を指し)にはない。聞きなさい。いやでも聞きなさい。どうやって、安利益子で金を借りたか、どうやって、家を見つけたか。私は、こういう細細した

ことに立向かって、ここまで和彦(この男とかつての恋人との間に生まれ、この男が恋人とともに捨てた子、素老人注)を育てて来た—そうお母さんはいっているんだ。私に反駁する資格はない』

このドラマは、本稿を書いている今の私には、人生が旅であるとはどういうことかを激しく考えさせるドラマであったように思う。

○再び、思い出したこと、その四

『一日の中に永遠を見なければ、永遠はどこにもない』という言葉。これは、加藤周一が映画『永遠と一日』(注3)を評した言葉である。一日の中に永遠を見る精神は、日常の中に非日常を見る精神でもあるだろう。

最後に、人生という旅の中で、日常と非日常はどのような関係性にあるのだろうか。生と死が同時に存在し進行しているように、おそらくは日常と非日常も二つの別のことではない。これも山田太一脚本であるが、一九八〇年放送のNHK大河ドラマ『獅子の時代』の主題歌にこんな一節がある(今回は歌がよく出てくるなあ)。

Our history again - 時の彼方に

作詞 阿木燿子

作曲 宇崎竜童

人の命は東の間で

星の一瞬の瞬きのようさ
無限の物差しで
計ってみれば誰だつて

点にも満たない長さだよ
乱れからくりの回り舞台で

女は愛が欲しいと泣くよ
待つてるだけなら恋する心も色あ

せる

おまえは日ごとに輝けよ

ああ 繰り返す時を見逃すな

熱く燃えろ生きる Our history again

宇崎竜童が歌うこの歌をBGMにして、ドラマの主人公の一人、菅原文太演じる平沼銑次が自由自治元年のむしる旗を掲げて走る場面が印象的であった。

誰の人生も一回限りの、点にも満たない一瞬の過程である。しかしそれは、一回限りであるがゆえに、個人にとって絶対的でかけがえのない人生である。それに比べて、人類が生きる、社会の歴史的発展過程は無限の長さをもつ、ある意味で永遠の過程である。永遠の過程の極々微小な一点を、かけがえのない具体的な個人である誰の人生も占めている(注4)。一日の中に永遠を見る先の精神は、微小な我が人生を社会の歴史的発展過程に位置づけ重ねる精神であるだろう。この精神は、日常を超えた精神である。日常を超えたところに旅の精神はある。

(かたちは心であり、心はかたちになる
■大分の素老人)

(注1)『日本の黒い霧』は、雑誌『文芸春秋』(一九六〇年一月号から十二月号)に松本清張が連載したノンフィクション。

(注2)今回調べてみると、評の言葉は、一九五一年十月の雑誌『群像』に発表された評論『再び「異邦人」について』(この評論は、中村光夫への反論である)の中に次のように記されていた。『つまりこの思想小説は徹頭徹尾抽象的にWHAT IS LIFEを取扱った素朴なもので、具体的に生きる事の根源であるHOW TO LIVEの問題は()では全然取扱われていない。唯前に述べたような、不条理人が不条理に対して如何にして生きるかという抽象的なHOW TO LIVEが多少ない事はないが、それは結局WHAT IS LIFEの範囲の問題であって、人間生活に最も必要なHOW TO LIVEではないのである』(広津和郎全集、新装普及版第九巻、四八五頁、中央公論社、一九八九年)。なお『不条理人』とは、広津和郎の評論によると、『常識人から見ると一つの異邦人』である。さらに言えば『異邦人』を巡る彼の評論(中村光夫との論争を含む)は、散文精神に興奮を覚えるというか、『異邦人』そのものよりはるかに面白い。それにしても、である。この小説を読んで異邦人の意味に気づきもしなかったかつての自分を私は秘かに恥じている。

(注3)『永遠と一日』は、テオ・アングレブロス監督のギリシャ/フランス/イタリア合作映画で、一九九八年制作。

(注4)個人は誰もかけがえない人生を生きている。しかし人類または社会の構成要素として個人をとらえれば(これはあくまで人類または社会の側から見ての話であるが)、要素としての個人にはいくらでもかけがえがあ

る。それは、人類と個人の関係の冷酷な一面である。よくあることだが、この仕事は君にしかできないと言われたって、この君がいなくなれば、次の別の君がその仕事をもっと立派にやっているなどということは、どこの世界にもあることである。重要なことは、かけがえない個人の人生は、個人が自分で守ること、または連帯した個人の力で守ることである。それは同時に、かけがえない個人の人生に対して、決して社会に口を出させないことである。社会が個人に口を出せるのは、個人の、いくらでもかけがえがある一面に対してのみである。たとえば、『期待される人間像』を国民一般に対して国が求めるのは国の政策として必ずしも否定すべきことではない。それは昔テレビで流行った、今や懐かしい言葉で言えば『カラスの勝手』である(国の政策が『カラスの勝手』などと言われるのは不幸なことではあるにしても)。しかしその人間像を国が私やあなたに求めはじめると、もはや『カラスの勝手』で済まずわけにいかない。

国であれ政治家であれ、権力が持たねばならないものは、『学ぶ気があれば学び取るであろう』という精神であり矜持である(レーニン、『戦闘的唯物論の意義について』大月書店編集部編国民文庫37『猿が人間になるについての労働の役割他』二〇九頁、一九六五年)。



哲学屋のつづき (38) 死を哲学する(現実編)

祖蔵 哲

行く川の流れば絶えずして、しかも元の水にあらず、
淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しく溜まりたるためし無し、世の中にある人と栖と、
またかくの如し。

鴨長明「方丈記」

冒頭から古典で始まった今回の「つづき」。前号まで「ポピュリズム」や「天皇制」などにやら生臭いテーマが続いていたので本来の世界に帰りたくなった。折々この「芥川だより」でも表紙に連載されている石川氏の「死をめぐるあれやこれ」が気になった。私もそろそろ「死」というものを考える年代になっている。哲学屋として死を考えてみたい。

哲学とは「死の練習」であるといったのはソクラテスである。プラトン著「ソクラテスの弁明」によると、彼は若者達をあらぬ神(デーモン)の教えで惑わしたとして告発され、死刑宣告を受ける。プラトンの脱獄の勧めをきっぱり断り、彼は言う「死を恐れるのは、死を知らないからだ、死を知っている者はそれを恐れない」と。

さて、「方丈記」に戻ろう。人が生きて上で、「今日、今、ここ。この時」という

一瞬一瞬はそれぞれ別の時間、場所であるけれどもそれが連続して「自分」になる。しかし、それは決して取り戻せない。それは川のごとく流れる。川の水が逆流するということがないように。私たちの生命は川のように連続するが、いずれ「私」もまた「泡」のごとく消えるのである。

しかしこの「無常」は頭の中では理解できるが、自分の現実になると普通の人は死というものに「不安」をいだく。「なぜ死に対して人は不安になり恐れるのだろうか。ある哲学者は四つの理由をあげている。一つ目は『肉体的苦痛』に対する恐れである。末期ガンや心臓疾患などを抱える人は耐えたい痛みと闘っていかねばならない。「理想の死はポックリ死」と言われる。二つ目は『別離』に対する恐れだ。愛する家族、友人と永遠に別れなければならない。自分の「過去」が一瞬に消え去る恐怖である。三つ目は『喪失』に対する恐れ。地位、名誉、知識など「もの」に対する喪失である。自分の肉体も含めて生きてきた証を失うことへの恐怖でもある。さて最後は哲学にとっても最大の『死後』への不安。「死」は未知である。なぜなら、死から蘇った人はいないからだ。以上『肉体的苦痛』『離別』『喪失』『死後』以上四つの死に対する不安を挙げた。しかし厳密にいうと、最初の三つはいわゆる「恐怖」「恐れ」であり、本当の「不安」は最後の『死後』のことだけである。なぜなら、「不安」も「恐怖」も同じ「感情」

だが「不安」にはその相手(対象物)がない。どうなるか「わからない」ことが「不安」なのである。特定の対象に恐れをなしている感情が「恐怖」であるのに対し、対象のない「無」に対して脅かされている感情が「不安」である。例えば、凶悪犯に刃物を突き付けられて小部屋に閉じ込められたとする。鋭い刃物や犯人を見て心は恐怖に包まれる。しかし、そのまま時間が経過して対象がなくなると、その恐怖は「不安」に変わる。何事も起こらないという「無」やこの先、何が起きるかわからないという「無」が「不安」を招く。「恐怖」は原因がわかっているのだから、それを取り除くことは原理的に可能なはずである。それではまずこの「死の恐怖」つまり「現実の死」を哲学することしてみよう。

「現実の死」に対する備えを最近では「終活」と呼んでいるらしい。「就職活動」に倣った「終末活動」かもしれない。では今回この「哲学屋のつぶやき」は少し趣向を変えて「終活」とは何かを具体的に考えてみよう。ある本の「終活アンケート」によると「自分の終活内容」は――

身の回り品の整理と処分(六一パーセント)、延命治療の意思表示(五二パーセント)、脳死での臓器提供の意思表示(三五パーセント)、葬式や墓の形式の意思表示(三二パーセント)、遺言状の作成(一九パーセント)、死を知らせたい人のリスト作り(二二パーセント)、自分史の作成(二二パーセント)となっている。やはり、「もの」や「人」に

対する別れの準備が多い。

さて次に「二度とない「人生」で思い残したものの「人生の後悔」とはどんなものか。

○自分のやりたいことをやらなかった。

○夢をかなえられなかった。

○悪事に手を染めたこと。

○故郷に帰らなかった。

○美味しいものを食べておかなかった。

○仕事ばかりで趣味に時間を割かなかった。

○行きたい場所に旅行しなかった。

○会いたい人に会っておかなかった。

これらの中でも

【自分対して後悔】

○自分が一番と信じて疑わなかった。

○自分の生きた証を残さなかった。

○生と死の問題を乗り越えられなかった。

○健康を大切にしなかった。

○神仏の教えをしらなかった。

【他者に対して後悔】

○感情に振り回された一生を過ごした。

○他人に優しくなれなかった。

○愛する人に「ありがとう」と伝えなかった。

○後悔先に立たず「わかっていてもできないものだ。」

さて、私が考える「心の終活」を話そう。これは「自分がいなくなる」ことに

対する心の準備と考える。まず對他者(家族、社会に対して)、これは(1)物理的(物の対処)と(2)精神的(心の配慮の

二つがあります。次に対自己(自分自身に対して)、これ

には(1)「人生の質」…自己としての(他

者比較でなく)(2)「人生の意味」…生まれ

れた意味はあったか。(3)「自分とは」…

私とは何であったのか。(4)「死後、何処

へ行くのか」その準備はできているか。

以上の四つのうち、最初の三つは「対象

のある恐れ」、最後の「何処へ行くのか」

は『死後』の「不安」に分類される。

現実の恐れのもっと重要なのが「人生の

質」の問題である。ソクラテスが言うよ

うに「人生はただ生きるではなく、善く

生きること」である。その意味から「自

分を失うこと」、病的には「認知症」にか

かることは恐ろしい。「自分」とは「過去

の記憶」のことである。この「過去」を

失うことは「自分」が自分でなくなるこ

とである。他者にとっては「そのような

自分」は生きているが、自分にとっては

「そのような自分」は死んでいるのと同

じである。病気としての「認知症」は「脳

科学」の面から研究がされており物理的

な原因であれば改善されるであろう。し

かし、それが生命の必然的活動つまり「死

への準備」であれば、私たちは甘んじて

受け入れなければならないだろう。

「死の哲学」(現実編)の根本問題は「死

後」の不安だ。自分は死んだらどうなる

のか、何処に行くのかという「不安」が

未解決の問題である。しかし、今号は(現

実編)なので「どうなるのか」ではなく

「どう納得するのか」という現実的、功利

的に考えることにとどめる。厳密にはこ

れは「哲学」ではなく「宗教」や「心理

学」に近いものだ。

まず死んだらどうなるのかの現実的な

考え方を紹介してみよう。医学的にはも

ちろん脳の活動が停止するということは

「無」になるということ、すなわちただ

の「もの」になるということ。納得とし

てはなんだか寂しいが。次には最新の科

学によると脳の活動機能が停止後に或る

分子(もともと外部と交流していた)は外

部に出るといふ報告がある。なんだか

「魂」の存在が証明されたみたいで少し

希望的納得感がある。ちなみに私個人の

納得物語であるが、死後の「私」は他者

の「記憶」に宿ると思っている。

さて、「死後」どこへ行くのかわからな

い「不安」に対しては、冒頭に言ったよ

うにその「不安」をなくすために納得で

きる「物語」を作ることが古来よりの人

間の知恵である。そもそも「神話」とい

うものも「人間はどこから来て、何処へ

行くのか」を説明、納得するためにある

のである。ではその納得のパターンはど

のようなものだろうか。

まず(1)「生まれ変わりを信じる」…人

は何度でも何度でも生まれ変わる。死ん

だら終わりではなく、永遠に続く…これは

一見良い希望のもてる納得だが、いつ終

わるのかがなく苦しい。(2)「死ぬと思っ

ているうちは死なない」…死ぬときはもっ

と穏やかで気持ちのいいもの。…「医学的

事実」であるが、考えてみれば妙な説得

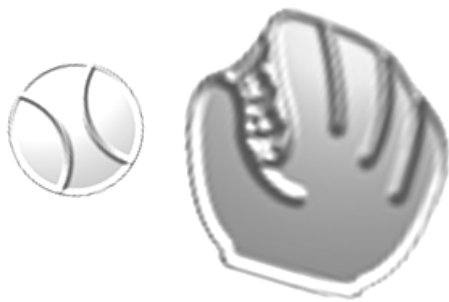
感がある。(3)「死は平等」…(お迎えの時

は自分で決められない。)どっちみち絶対に死ぬ、心配いらぬ。自分だけではない。…これも「医学的事実」。どうも人間、考えすぎか。最後にガツンと私たちに刺激を(4)「死ぬのが怖い人の特徴は自分のことばかりを考えている人」…いっそ自分が死んだと思って他人に尽くしてみる。(自分の執着を離れる)…もつともである。最後に私が現在のところ、哲学以外で最も注目している論説を紹介しよう。

受動態意識仮説『心の地動説。自分とは、外部環境と連続な、自他不可分な存在。そして、「意識」はすべてを決定する主体的な存在ではなく、脳の中で無意識に行なわれた自律分散演算の結果を、川の下流で見ているかのように、受動的に受け入れ、自分がやったことと解釈し、エピソード記憶とするためのささやかで無知な存在。さらに、意識の中で最も深遠かつ中心的な位置にあるように思える自己意識のクオリアは、最もいとしく失いたくないものであるかのように感じられるものの、実は無個性で、誰もが持つ錯覚に他ならない。(中略)私は、△私Vのクオリアや「私」の記憶をいつか失うことに未練がないといえようことになる。まだまだいろいろなことをしたい。しかし、今を生き生きと生きることと、死を恐れることとは別次元の話だ。私にとつての△私Vや「私」の最終的な喪失を恐れる必要はない。なぜなら、△私Vの仲間には世界中に満ち溢れているから。自分の

△私Vがなくなつたくらいで、この豊かな世界はびくともしない。△私Vのネットワークは不滅だ。だから、安心していい。』
「私」というものを「実体」としてでなく「機能」としてとらえ、それにそれが外部の自然につながっているという壮大な説である。儂いようだけれど永遠の宇宙とつながっているというと妙に安心する。

以上、今号は「死の哲学」(現実編)、つまり「死の恐怖」を語った。しかし宗教や自然科学とは違つて、哲学とつて死はやはり「不安」である。次号は「死の哲学」(哲学編)に入りたい。



連載「おっちょこちょいぼけ」(52)

—昭和女、どっこい日記—

北朝鮮問題、

おばさんにも言わせろ…の巻

私は平和を愛する一般庶民だ。「人の命は地球より重い」なんぞという言葉に感銘を受けやすく、善人のふりをするのも好きだ。たとえば、みんなが嫌いなキム・ジョンウン君のことなんか、思えば、気の毒な家に生まれちゃつたよな。三十三歳なんて、日本だったらまだ若造で、ヒラのサラリーマンやんか。適当に仕事して、ビール飲んで、テレビで野球見たりサッカー見たりウダウダしていられる年なのに、重いものを背負わされて。ストレスでぶくぶく太るのも無理ないワ」と同情的だったし(顔とか体型とかヘアスタイルは気持ち悪い、と思つていただけ)。

「アメリカとか大国は核を持つてもよくて、北朝鮮はダメというのも、よく考えたらおかしくないか。北朝鮮もダメ、アメリカもダメ、インドもダメ、ロシアもダメ…が当たり前やろ」と自分としてはごく真つ当なことを考えていた。

だが、ここに及んで、善人のふりなんかしたくなくなつた。ジョンウンの命も、当然、地球より重はずだが、「はあ? ふざけんな、核だのミサイルだの、ひと様の命を危険にさらしやがって。当然、死刑! 即刻死ね! すぐ死ね!」

ときつぱり思っている。

だが、不思議だ:と思うこともたくさんある。あの小国で、どうしてアメリカに勝てると思つているんだろうか。核があるから、といつても核攻撃をしたら、その時点で、自分たちも滅びるだろう。十年以上前に、「アメリカには北朝鮮を旧石器時代に戻せるぐらいの軍事力がある」という話を聞いたことがある。

アメリカの軍事力はこの十年の間に増強されているはずだから(コンピュータシステムなんかで)、旧石器どころか氷河期とかまでいっちゃうんじやないか。しかも、カネがないと戦争に勝てないということぐらい、最近では小学校四年生の子供でもわかつている。昔の日本の軍部のえらいさんたちも知つていた。戦争前、「二年や二年は暴れてみせます」と言つていたらしい。戦争が四年続いて、日本は完膚なきまでに負けた。戦争をしていなかつたはずのソ連にまで負けた(だから、北方四島を返してもらえない。卑怯だぞ、ソ連! うちの九十一歳の母は七十二年経つた今もブンブン怒つている、「やり方がきたない」と。母の怒りで、ソ連が崩壊したかもしれない、ということはないけれど、このまま怒らせておいたら、ロシアも崩壊するかもしれない。早めに、母が生きているうちに、熨斗をつけて返してほしい)。

熨斗をつけて」というところに、大阪のおばはんの厚かましさを感じてほしい。

本来、「熨斗をつけて返す」というのは、

「金輪際、いらぬから返す」という意味だが、私はお詫びのキャビアぐらいはつけてもらいたいと思う。正直言うとうと、キャビアなんて本物を食べたことがなくて、ホテルの立食パーティーで出るやつぐらいだが、あれはまずいし、舌が黒っぽく紫色になったりする。たくさん食べたら、きつと毒になると思う。たくさん食べる機会がないから別にいいんだけど。

へろへろと話がロシアからキャビアに行ってしまったが、北朝鮮の背後で操っている国があるのは確かで、カネやら軍事力を提供しているに違いない。

共産主義国家対自由主義国家。といえ、聞こえがいいが、要は大国の代理戦争。やくざ映画でいえば、北朝鮮はチンピラで、鉄砲を持たされて「敵のタマ(命)ね」取ってこいや!とかわれて、「へい!」と死に行く、アホな若造(ジョンウン君も若造だった!)みたいなものだ。

だけど、もしそうだったら、どうして北朝鮮の国民が「やっつてられるか!」と怒らないのか、という疑問が残る。フツウ、いやでしょう? 鉄砲玉になるなんて。ジョンウン君だけは贅沢三昧に暮らしているから、今の暮らしを守りたい、祖父さん、父さんの時代のまま、君臨していたという気持ちがあるだろうけど、国民の皆さんは「なんか、いっつもお腹すいているし、窮屈だし、デブの若造に

エラそうにされて、やっつてられん」と思わないのだろうか。

ウチの母がテレビを見ながら言っていたのだが、「〇子(私の名前)、見てごらん、北朝鮮の人たちの拍手する姿。拍手の仕方が悪いって処刑されちゃった人がいるから、みんな必死で感じて拍手して、悲壮感が漂ってるから。それに軍事パレードで行進している兵隊さんはみんなガリガリ。あの国で、太っているのは、あのジョン何とかだけやないの?」。母は、金日成は覚えていたのだが、以下は「ジョン何とか」でひとまとめ。ジョンイル(正日)もジョンナム(正男)も、ジョンウン(正恩)も分け隔て(?)しない。

だけど、「お兄さんの方(ジョンナムのこと)が継いでいたら、北朝鮮の人も幸せやったやろうに。殺されちゃったねえ」と惜しんでいる。私もそう思う。

北朝鮮問題で、私が一番不思議なのは、どうして北朝鮮の人たちが「今の体制、もうしんどい、やめよう」と立ち上がらないのか、という点だ。「そうしたら、軍部に殺されるんやろう、だれも自分は死にたくないで」と私の中の別のワタシが言うが、このままだったら、北朝鮮に明るい未来はない。核を使ってアメリカを滅ぼして、と考えるのは勝手だが、そんなことをしたら、即刻、核返して水河期に突入する。よしんば、最初の一撃でアメリカが減びても、放射能が世界中を汚

染する。食べるものがなくなって、死ぬのを待つだけだ。肥満児のジョンウン君としては、最低の死に方ではないか? ご自慢のヘアスタイルも維持はできないだろうな、髪の毛が抜けちゃって。

日本に間違つて落ちて、日本が壊滅しても、原子力発電所がたくさんあるから、漏れ出た放射能がジワジワ地球を滅ぼしてしまふことには変わりはない(日本、危険!)

だからね、日本のおばさん、悪いことは言わない。もうやめとき! そして、バチカンに逃げ込み、法王様の下で、懺悔(告解)というのかしらね?)でも何でもして、自分の命を全うしなさい。あの家には生まれたのは、アナタのせいやない。あとは法王様が守ってくれるって。幸い、メキシコとの国境の壁の件で、トランプさんと法王様は仲が悪い(多分)。身柄を寄越せ、と言われても渡さないと。人道主義つてヤツがあるから、白い旗を振っちゃえば、命までは取られない(多分)。でも、二十三歳という若さがあるうちが勝負だからね、四十歳超えたら…、無理やね、死刑やね、斬首やね。だから、早く!



(AO)

大峯奥駈道(11)

梵店主

最終電車で近鉄吉野に着くと、小雨が降っていた。駅のベンチで寝ることも考えたが、強硬スケジュールを考えれば、そんな事は言っていられない。荷物を整理してザックに詰める。大きなザックがパンパンになる。見ただけで圧倒されるザックを担ぐとずしりと重い。

さあ、大峯奥駈道の出発だ。真夜中の吉野を歩き出した。雨具を着て地図を片手にライトで照らしながら慎重に歩く。よつちゃんも高ちゃんも、初めての吉野で土地勘がない。急な脇道を登ると、蔵王堂のある金峯山寺から奥千本口の金峯神社に続く参道に出た。土産物屋や旅館が立ち並ぶ細い道である。車一台が通れるぐらいの道である。どの家々も寝静まつて街灯が所々ついていていた。

春の桜見の頃は、人でにぎわう下千本も静かに夜霧に包まれている。真夜中の行進は、思いのほか神経を使う。ライトで照らしながら道の標識を確認し、地図を見ながら歩かなければならない。また、寝静まった静けさの中では、大きな声を出すのとはばかれるような静寂であった。一時間ばかり歩いて杉木立の道になった。濃い霧に覆われた道は先が見えない。ふたりが重い荷物に息を弾ませながら歩いていると、急に足音がして非常に明るい光が後ろから現れた。

「ああ、びっくりした。山の中で一番怖いのは人間だ」

と言いながら通り過ぎていく。追いかけるように「どこまで行くんですか？」と問いかけると「弥山まで」とかすかな声が聞こえて彼は霧の中へ消えてしまった。ライトを右手に掲げて道を照らし、荷物を担いで走っていく姿は、山の天狗を思わせる。

ここから弥山まではかなり遠い。走って行っても十時間はかかるだろう。まして真夜中、険しい山道を走るのは至難の業である。

しかし、彼は軽々しい走りで峰々を越えていくのだろう。姿からは修験者のそれではなく、今はやりのトレランのそれでもなく登山着姿であったように見えた。一瞬の霧の中であつたから見間違ひをしたかもしれないが、声は大きく慣れた道を行く自信を感じた。

よつちゃんは、えらい奴がいるんだなあど驚いた。歩くだけでも大変なのに走るとは…。そのうえ遙か遠い弥山まで行くとは…。なんとという奴だ、まさに天狗の化身ではないか。などと想い乍ら歩いていた。

よつちゃんが危惧していたように、背負った荷物がだんだん重く感じてきて、息も荒くなり歩くのも遅くなってきた。

よつちゃんは、高ちゃんに「どこかでテントを張って寝ようか」と言う。高ちゃんは

「もう少し歩いたら、金峰神社の休憩所があると地図に書いてありますから、そこで寝ましょ」

と返事した。よつちゃんは、

「そうか」もう少し頑張らないといけな

いと思ひながら真つ暗な道を歩いた。

吉野駅から二時間あまり歩き続けてようやく金峰神社の山門に着いた。その脇に

屋根のある広い休憩所があつた。屋根だけの休憩所だがあり難い。ここで寝れる

と思うと、よつちゃんはうれい。もう歩かなくてもいいからだ。

すぐにザックを下ろし、テントを張る。とにかく早く寝たいのだが、腹も減っている。何か食いたい。持参している行動

食を少し食べた。少し、落ち着いて周りを見るとテントが片隅に張られていた。

吉野駅に着いた時に会つた女性だろうと思つた。

大峰は女人禁制の山である。彼女は、それを承知で登るのだろう。大峰山上ヶ

岳の寺が開くのは、明後日であるから、明日中には山上ヶ岳を通過し女人禁制の

エリアを通過してしまう予定なのだ。よつちゃんは、よくわからないが千年も守

られてきた女人禁制の習慣がいつも簡単に破られていく現実を目にしたのである。

山上ヶ岳は寺の私有地であるから、女人禁制も許されるのかもしれないが、今の時代、女人禁制もないんじゃないかと思つた。

大人の今昔物語(37)

石川 吾郎

今回は、貴族が忍んで通う女房の仕える屋敷の侍たちにリンチされそうになり、辛うじて難を逃れる話し。なかなかスリリングです。教科書に出ない度は四／五。

駿河の前司・橘季通、リンチを逃れた話し

(第三卷 第十六)

今は昔、駿河の前司、橘季通たちばなのはるゆきみちという人がいた。この人が若い頃、自分の仕えている所ではないが、高貴な身分の方の屋敷に仕える女房を口説いて、忍び通つ

ていたことがあつた。そこに仕える侍たち「高々六位風情の者が、このご一族

でもないのに、宵や晩に屋敷に出入りするの、はなはだ面白くない。さて閉じ

こめて懲らしめてやろう」と、みなで言い合せていた。季通は知らぬが仏で、

普段通りに召し使う童わらわ一人だけを連れて、徒歩でやつてきて、忍んで女房の

局つぼねに入りこんだ。童には「夜明けになつたら迎えに来い」と言いつけて返した。

* * *

そうする間、例の懲らしめてやろうと企む侍たちは、様子をつかかっていたが、

「例の男がやつてきたぞ」と仲間知らせ回り、あちこちの門を閉ざして鍵をかけてしまった。その鍵を隠し、侍たちは

杖を地面に引きずって音をさせ威嚇をし

て、築垣ついでがきの崩れた部分には、立ちふさがつて出られないように見張りを立てた。

季通はその局に留まっていたが、召使いの少女が、この様子を見て主人に知らせる。女房もこれを聞き季通に告げる。季

通はまだ臥所にいるが、これを聞いて起きあがり、着物を調べて、どうしたもの

かと思ひあぐねた。女房は「ご主人のところに行つて様子をつかかってみましょ

う」と、尋ねてみると「侍たちが共謀してとはいいながら、この殿様も黙認を

なさっている」との情報を仕入れてきて、女房は局に戻つてきて、困り果て泣いて

しまう。

「ひどいことになつたな。恥をさらすことになつてしまふ」と思うが、逃げ出

しようもなく、女房の召使いの少女をやつて「出て行く隙がないものか」を偵察

させるが、要所には侍たちが四五人ずつ、袴を括りあげ、太刀を掲げ、杖を突きつ

つ立ち並んでいる。この様子を聞いた季通は、もうダメだと嘆息する。

* * *

この季通という人、智慧がまわり、力も強かつたが「今は何ともできない。こ

れもしかるべき定めなのだ。夜明けになつて尚、この局に留まれば引つ張り出し

に来る者たちと差し違えてしまうことになる。しかしそれでも後で自分の正体が

ばれてしまう。しかし相手も、おいそれと手出しはできないはず」と算段をする。「使う童が事情を知らずに夜明けに向か

えにきて、門を叩くようなことになれば、やつらに捕らえられてしまうだろう」そんなうなつたらあんまり不憫な気がする。そこで召使いの少女をやつて、様子を見にやるが、侍たちに罵られ泣き泣き帰つて、うずくまつてしまつてゐる。

* * *
* * *
* * *

そういうするうちに夜が明けてきた。この童はどうやつて入つたのか、屋敷に入つてきたのを侍どもに気づかれ、「小僧はだれだ」と問われる。この声を聞いてまずい返事をするのではないかとひやひやしている、童は「読経をあげる坊さまに仕える童です」と名乗つた。「よし、通れ」と許された。

「上手くやつたな。局に来ていつもの侍女の名を呼ぶだろう」と予想していると、局の方には来ないで、前を行き過ぎていく。季通「よしよし、賢いやつちや。機転の利くやつ。何とか計略を立ててくれるだろう」と、童の考えることを理解している、しばらく待つてゐると、通りの方から少女の声で「追いはぎ！人殺し！」と叫ぶ声がある。そこに立つていた侍たち、この声を聞いて「捕まえる。たいしたことはないだろう」と、一同走つてゆき、門も十分開ける間もなく、われ先に走り出て「どっちへ逃げた」などと大声で尋ねたりしている間に、季通「これはヤツがやったことだ」と了解して、走つて出る。門は施錠してあるので、まさか門から逃げるわけがないと疑わず、

崩れの所にはまだ侍がいて話しをしていたが、季通は門に走つていつて、その錠をねじつて引き抜くことができた。

* * *
* * *
* * *

門を開いて大路を逃げ走り、辻々を幾度か曲がつて、童と出会い、共に一二町ばかり来て、安心して歩きながら、季通、童に「どんな事情だったのか」を尋ねた。童の曰く「門がいつになく閉ざされていまして上に、築地の崩れには侍たちがたむろして、厳しく詰問してきましてので、これは怪しいと思ひ、こちらも読みの僧の童子でございまして名乗りますと、入れてくれました。一旦わたくし

この屋敷の召使いの少女が大路にしゃがんで大便をしておりましたところを、その髪をひつつかみ、打ち伏せて着物をはいでやつたので、その叫ぶ声に連れて侍たちが出てきました、今のうちにきつとお逃げになるものと存知まして、この召使いの少女は放り出してこちらの方に参つたのでございます」と、経緯を説明した。その後二人はともに帰つていった。
まだ年端のいかなない少年だったが、賢い使用人には助けられたものだ。
この季通は、陸奥の前の国司、橘則光の朝臣の息子である。この人も剛胆で武芸にも長けていたので、このようにも逃れることができたのだと、伝わっている。

《コメント》

実在の人物の、リンチの危機を逃れたエピソードです。平安時代にもアバンチュールには、危険が伴うものだったようです。

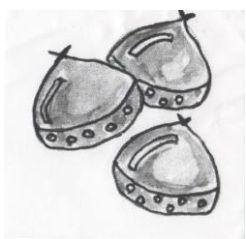
このころには「侍」というものが、貴族の邸宅の警護にあたる使用人であることが、よくわかります。そして下級貴族に対しては、あるリンチも辞さないような勢力をもっていたことをうかがわせるように思います。

またこの物語では、使用人の少年・童が活躍していますが、この童子の語る話

がなかなか衝撃的な内容を含んでいます。つまり屋敷の召使いの少女が、屋敷の外

の路上で夜明けに大便をしている姿です。このことについて、物語は特別にコメントは残してないので、これは特別のことではなく日常的なことなのだろうと想像できます。おそらく平安時代の京

の都の大路・小路は、トイレの役割をかねていた、ということでしょう。こういった固形の排泄物は、恐らく当時数多くいたと推定される野犬のエサとなつたのではないかと想像されます。



B級サラリーマン渡世譚(50)

明石 幸次郎

K村が話した営業部員としての心得で、特に、韓国に出張した時の注意事項などは、会社に所属している社員にとつては、守るべき当たり前の事である。

しかし、男という生き物は、往々にして権限を持つと自分がエラクなつたと勘違いし、相手はその権限を自分に有利なように使わせて、利を得ようとする。

飲ませ、威張らせ、煽て、喋らせ、握らせ、抱かせる」と、あの手この手で仕掛けてくる。その甘美な？蜘蛛の糸に掛かると、相手の思うつぽに嵌つて、その糸から抜け出せなくなつてしまうこともあるようだ。

これは、キタ新地のクラブ、スナック、バー、飲み屋などが、数千軒も営業しているのを見れば、「色んな蜘蛛の糸」の仕掛けが提供されているのが分る。

特に高級クラブなどで、接待客が接待側の意を酌んだ、やり手ママと、美人のホステスに囲まれて、「〇〇ちゃん、空けるわよー」と、ドンペリを飲まされ、煽てられ、持ち上げられ、そして喋れば、「すごいーおエライ！お話が高尚で、素敵ですね」と接待する側と一緒に持って持ち上げられ、ドンペリが回るとコロコロといつてしまうケースもある。

無論、接待される客が全て、接待される側の言いなりになることはないが、何

回もやられていると、男は、ついつい情実に流され、接待側の顔も立てようかとなってしまう。それがエスカレートすれば、身を崩し、気がつけば、新聞の社会面で、偶に見るような事件になってしまふこともある。

まあ、接待文化は、昔から煽てに乗り、直ぐに自慢したいアホな男という生き物の為に、女という冷徹な生き物が高い料金を合法的に頂く為に、あの手この手を使い、賢い男と組んで金儲けと、女性の雇用の機会を作り、芸という技能を叩き込み、それを文化として昇華させたものがある。その最高のものが、京都の祇園に残り、その価値は今も維持されているようである。

健全な男として、生まれたからには、死ぬまでには、出来れば、元気なうちに、誰かの接待で祇園に連れて行って欲しいものだと思っている。

残念ながら、明石は権力も権限も無い、況して自分で行ける財力の無いので、利を得られない男に誰が相手にするのか？未だに祇園行きは、実現出来ていない。

余談であるが、お隣の韓国は、永い間、接待文化を育てて来て、自分達の妓生文化が日本に渡来人と共に伝わり、それが日本的に洗練され、「クールジャパン」として、生き残っているのが芸者及び、祇園であると、少数の日韓の学者は主張し、そのオリジナルは韓国にあると言っている。

K村は、何故か「明石、お前、韓国では気をつけよ！」と、親身に？助言し「韓国に行く前に、あそこに座っている白髪のおっさん、名前はH川さんや。韓国には、本人曰く、五十回以上も出張しているらしいわ。商売の話は別として、H川さんの話を良く聞いてから行った方がエエと思うよ。後で挨拶しておけ！処で、お前のその安物のネクタイは、どこのブランドや？もう少しエエ物せよ」と、話題が営業の心得から、ネクタイにまで及び、明石のネクタイを触り、その裏のタグを見て「おう、バーバリーか、まあまあやなあ。そうや、そのネクタイに違和感があるのは、お前が着ているYシヤツと合っていないからや。ハツハツハ。トータルコーディネートを心掛けねばなあ。仕事もそうや！人生、全てに通じるんやで。F田、お前もや。ちょっとK田さんが、俺を呼んでるわ」と言うだけ言って、ビールの入ったコップを持って立ち上がり、K田部長の席に向って行った。

K村が席を立つてから、F田が「明石さん、言いたい事を、本音で喋る、変わったタイプの人ですね。この固い会社で、生真面目な社員が多い中で、あんな人がよく生き残っているんですね。本音で、しかもため口で部長にも課長にも喋りますね。あのやり方は、意識して演技されてるんでしょうね？」とK村の印象を述べた。

明石は頭の回転が悪いのか、F田の言った「演技している」と言った意味が分からず、引かなかったので、「F田さん、演技している、言うのは、どういう事？又、何で人に対し演技する必要があるの？あの人は、あのスタイルが地で、それが、K村さんの本性であり、本音のままで、言ってる様に思うが？」

「明石さん、甘いですね。人間だれしも、他人に自分を良くみせる為、又、正しい事を言っている様に思わせるために、意識して演技をしませんか！K村さんもあれはあれで、あの長身とルックスと体格で自分を心身ともに、大きく見せようと演技して、あんな言い方と、一見乱暴そうな応対をされていると思いますよ。まあ、相手によつては、嫌われたり、誤解されたりするでしょうが、それも、計算して演技されていると思います。まあ、あの人だから、あの演技で通用しているので、私等は真似は出来ませんし、しない方が良いでしょう。私は違うスタイルの演技をしますよ。明石さん、K村さんの演技スタイルを真似したら、あきませんせんよ！ハツハツハ」と言ってから、明石の空になったコップにビールを注いでくれた。

そこに幹事のN川が「F田君、明石さんと熱心に何を話してるんだよ。又、K村さんに何か言われていたの？」と東京訛りで話しかけて来た。

明石さんが思い切りイジられてましたので、ビールを勧めて慰めています。」

「F田、君なあ。明石さんとは、今日、早朝から、東京まで一緒したが、M居さんに対しても、M商事にも、結構、冷静に正論でもの申されたので、K村さんにイジられても、気にされてないと思うよ？ねえ、明石さん！君の方が心配になるよ」とF田の外大の先輩らしく、話しかけて、「F田君、君は知らんと思うが、明石さんは、堺資材の時に、君の課にいる商社出身のエリート、T畑さんに、クレーン会議の席で、始まった途端に、工場に物申す前に、輸出部の仕事の責任は何んですか？それを先にやって下さいよ」と嘯みついて、その会議を終わらせてしまったと言う、逸話の持ち主らしいよ」と持ち上げてくれた。

F田は意外な顔をして、「へー、そんな逸話があったんですか？明石さん、又、その時、どういう演技をされたんですか？あの押しの強よそうなT畑さんを、だまらしてしまつたとは？」と明石に顔を向けてきたので、「演技なんかしてないよ。一方的にクレーンを出した責任と補償をT畑さんが要求されたので、その反論を地で行ってしまっただけや。偶々、T畑さんは、頭のいい人だけに、私が言った事を直ぐに理解して、これ以上会議をしても、自分の立場がヤバイなあと、鉾をおさめられたと思うんや」と二人に言った。

「枕草子」で最も多くの人たちに知られているのは「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」という例の書き出しの部分に違いあるまい。

そして、それと同じくらい知られているのは二八二段「香炉峰の雪」の話である。雪がたくさん積もった日に定子中宮が「香炉峰の雪はいかがであろうか」と清少納言に声をかけられた。すると彼女は簾を持ち上げて外の雪を示したところ中宮が「さすがは清少納言、すごいねえ。」と褒め讃えたという話である。中宮の問いかけが白居易の詩「香炉峰の雪は簾を撥げて看る」によるものだと思えば、理解して行動した清少納言の自慢話といつてしまえばそれまでだが、ここでは「笑い」という点からもう少し深入りしてみたい。煩わしいかもしれぬが原文を示し、その後で拙訳をのせておく。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃すすびに火おこして、物語はなどして、集まりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかにならむ」とおほせらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。人々も、さることは知り、歌などにさへうたへど、

思ひこそよらざりつれ。「なほ、この宮の人にはさべきなめり」といふ。

(雪がたいそうの降つたある日。女房たちは格子もあげずに炭櫃(火鉢)を囲んでよもやま話に夢中になっていた。中宮様が「清少納言よ。香炉峰の雪はどんなであろう」と問われた。私は格子を人にあげさせ、そして中宮の御前の御簾を私があげたところ、中宮様は「さうとお笑いになった。おそばに侍していた女房たちは「香炉峰の雪が白居易の詩にあることなどは知っており、歌にも詠みますが、とっさのことで思いも寄りませんでした。やはりこの中宮にお仕えする女房としてふさわしい人かどうか」と言い合った。)

この章段は有名な話ではあるが、清少納言の自分から御簾をあげるという振舞いに関しては昔からすこぶる評判が悪い。たとえば、江戸中期に寛政の改革を行った松平定信は清少納言の行為に対して「童なんぞに『あれかかげたまへよ』など、ほのかに言ひしこそよけれ。いと女はかかるべし(召使いなどに『あの御簾を上げなさい』などと、そつと言つた方がよかつた。まったく女はこんなようだ」と「花月草子」の中で書いている。「まったく女はこんなようだ(から、困っちゃうんだよね)」の部分はとてもかく、定信は清少納言自身が御簾を挙げているのを、女童にでもさせたらよいと非難している。古典の世界の常識としては定信の言う通りである。しかし、定子はそれを非難するどころか「さうと笑っている。これはどう

したことか。以下、少し細かい話になるかもしれないが、どうかしばしお付き合い願いたい。

さて、「香炉峰の雪」を考えていく上で、まず注目したいのは清少納言が中宮の問いかけに対して「中宮がおつしやりたいのは白居易の詩のことですね」などと即答していない点である。

中宮の問いかけに対して清少納言はまず下級の女房を呼んで格子をあげさせ、それからゆつくりと中宮の御前にある御簾をあげた。ここで定子の問いかけと答えの間には時間差が少し生じている。中宮から何かの問いかけがあれば機転をきかし即座に応答するふだんの清少納言とはまったく違う応答ぶりである。たぶん、中宮もまわりの女房たちも、いったいどうなるのだろうか」と事の成り行きを見守っていたことであろう。その時間差の効果を現代の話芸人や俳優たちと同じく彼女はしっかりとよんでいたに違いない。やあつて周囲の視線が自分に集まっているのを確認した清少納言は裳裾をさつとさばいて前に進み出るや、御前の御簾をあげて見せる。この人の意表を突くような派手な振る舞いに、一同からは感嘆の溜息が「ホウツ」と出され、続いて笑いの渦がわき起こった。

このようにみえてくると「香炉峰の雪」の段は清少納言が漢詩の知識をひけらかした段というだけでなく、彼女が笑いを仕掛けて見事に成功したことを記した

章段であるといつてもよい。

ここで注意したいのは定子中宮のサロンがもっていた雰囲気である。清少納言がしたような芝居がかった行為は、ひとつ間違えれば大げさな下卑たものと受け取られかねない。また、清少納言が巻き上げたのが、定子中宮の御前の御簾であるのは大きな問題に発展しかねないことであつた。「見る」が「男女の仲になる」という意味になる当時のこと。高貴な身分の女性が他者に姿を見られるということとは重大なる禁忌(タブー)であつた。だから御簾を巻き上げるといふ行為はその禁忌を犯す意味をはらむ行為なのである。中宮に仕える侍女としては無礼きわまりない、しかも主を主とも思わない不忠の行為といえた。ところが、中宮はその無礼をとがめることもなくお笑いになつたという。この主従の常識外れぶりは並大抵のものではない。自分の主人の中に流れている「申樂ごと」の血が、自分の過剰な演出ぶりをおもしろがってくれりと清少納言が確信していたからこそできたことであろう。また、定子に仕える女房たちが集うサロンであれば必ずや自分の行為は受け入れられるはずという確信をもっていたに違いあるまい。

(道隆のありさまは)いともの華やかに今めかしう、愛敬あいぎょうづきて気近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も、細殿つねにゆかしう、あらまほしげにぞ思ひたりし(定子の父道

隆のありさまはとても明るく賑やかで魅力にあふれ親しみやすかったので、定子中宮のサロンは殿上人たちも、その御部屋にはいつも心ひかれ理想的な場のように思われていた

と伊周のライバルだった藤原道長を随所で賞讃している「栄花物語」でさえも定子のサロンは「あらまほしげ」であったと高く評価されている。御簾を自らあげるといふ清少納言の行為はこのサロンの雰囲気があつたからこそ可能な行為だったのである。

では、清少納言の振る舞いに対する定子中宮の笑いの意味は何だったろうか。まず、この発言がなされた状況を確認してみよう。「例ならず御格子まありて」とあるので、定子のサロンは天候がどうであれ、格子をあげて外の景色を見るのが常であつたらしい。いつも開けてあるはずの格子があげられていなかった。

だとすると「香炉峰の雪いかがならむ」は定子のちよつとした苛立ちの表現だったという可能性がある。「雪がこんなに降つた日なのに外も見えないなんて、何という無風流なこと。」と思つても「あなたたちは何をしているの」と女房たちを叱れば、それこそ無風流そのもの。そこで考へついたのが「香炉峰の雪いかがならむ」。こんな時に自分のサインにすばやく気づいてさつと応えてくれる人。それは清少納言。ということでの御指名であつたのではないか。また清少納言も一瞬どう答

えようか迷つたはず。「それは白居易の詩です。」と答えるのは簡単なことだが、「白氏文集」は当時の常識。そんなことを中宮が自分に問いかけてくるわけもない。すばやく思慮し気づいたのは、いつもと違つて閉められた格子。中宮様は「格子をあげて雪を皆で見ようよ」との御意に相違ない。それなら、格子、御簾をあげるにしても少し過剰な演出で答えようとした。その結果、芝居がかつた行動となつたのだと筆者は考えている。

主人である定子のサインに見事にこたえた清少納言の好プレー。当然のことながら、この息の合った二人のラリーによつて定子のサロンは一段と明るい場となつたに違いない。また、そのラリーの繰り返しを通じて主従のきずなも一段と強いものとなつたであろう。

こうしてみると「笑いの仕掛け人」である清少納言の振る舞いも皇后としては「型破りな」定子中宮がいてこそものだと分かつてくる。こうした定子中宮の「型破りさ」を示す例を「枕草子」からいくつか紹介してみたい。

たとえば「清涼殿の丑寅の隅の」(二一段)には定子中宮は「御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへる(中宮様は御几帳を押しやりて建物の一番外側にある簀子との境の御簾さわまでお出ましになつて)」とあり、「関白殿、二月二十一日に」(二六三段)にも『いざら』とて、御几帳のこなたに出でさせたまへり(中宮様は『ど

れ』とおしゃつて、御几帳のこちら側に出でおいでになつた)」とあるように、自ら進んで自分の姿を人前にさらしている。これは当時の貴族の常識からはとても考えられないことである。おまけに後にあげた章段では豪華な正装に着飾つた自身の姿を清少納言に見せながら「われをばいかが見る(今日の私のようなすは、どうかしら)」と問いかけている。后という最高位の女性とも思えぬ近い雰囲気を感じられる。まるで女友達に「どう、似合うかしら。きれいに見える。」とでも尋ねているような甘えと自信とが混ざつた語調に、お気に入りの女房に対する気安さを感じられる。

ついでに言えば几帳というのは、移動可能な布製の間仕切りであり、要は人目をさえぎるためのものである。その几帳をあえて押しつけてこちらに出てきたというから、この中宮は並みの女主人が姿を隠すために奥へと引つ込むとは逆に自ら前に進み出ようという積極性を持つた人物といつてもよいだろう。

さらに例をもう一つ。平安貴族は音楽に親しみ宴の場でも日常生活の場でも自慢の腕前を披露し合つた。楽器は太鼓、笛、琴、琵琶といったものがあつた。定子の夫である一条天皇は横笛の名手として名高い。日常的に笛を吹き定子に聞かせていたことは「枕草子」の随所にうかがわれる。定子ももちろん音楽好きであり、中でも琵琶がお気に入りであつた。

「職におはしますころ、八月十よ日の」(九八段)はこんな書き出しで始まる。月明き夜、右近の内侍に琵琶ひかせ、端近くおはします(月の明るい夜、中宮は右近の内侍に琵琶を弾かせて、端近くの所にいらつしやる。)

これも定子中宮のいる場所は「端近く」である。「端近く」という場が人目につきやすいと嫌悪される空間から、月の光が差し込んで楽器の弾奏にふさわしくかつ好ましい空間へと価値観の転換がなされている。高貴なる人は奥深きところにて、端近くにいたのは卑賤の者なのだ、といった既存の価値観を超えて、雪や花や月につけてもあるいは風雨につけても移り変わりゆく季節の趣にふれ、男女であれ訪れる人との知的でしゃれた対話を樂しむ。外界の刺激と知的な刺激に満ちあふれた場として新たな宮廷文化を創ろうとしているかのようである。「栄花物語」が「いたう奥深なることをわろきものに思ひて、今めかしう気近きありさまなり(たいそう大奥に引込みがちなことは悪いことと思われて、当世風に華やかで親しみやすい御ありさまである)」と書いている通り、従来の価値観に縛られてきた女性たちがパツと解放されたように積極的に御簾の近くに行き、やつて来た殿上人たちと機知に富んだ知的な会話を重ねていく新しい宮廷サロンのありようを定子はつくり出したのではないか。

この定子の新しい宮廷文化づくりは、

新しいことを始めようとすれば常に激しい抵抗にあうように、かなり白い目で見られたらしい。しかし、定子は何といつても、彰子が中宮となるまではただ一人の後であり、一条天皇から深く愛されていた女性であった。また、何よりも定子のサロンは大評判で多くの殿上人が毎日押しかけていた。そんな後押しもあって「枕草子」の中で定子は最後まで自分の意志を崩してはいない。

そもそも女性が端近くに出て何か不具合が生じるのだろうか。「端近く」が人目につくというのであれば、不用意に姿を見られないということが重要であって、常に見られてはいけないということではない。風や光の趣を肌感じて楽器を奏で、落花の中で詩歌を吟唱するという風雅もせず、いたずらに奥に引つ込んでいるのは、かえって無粋というもの。むしろ自己を優雅に見せる演出こそが大事であらう。

そのような発想の転換を示す好例となる章段が「上の御局の御簾の前にて」(九二段)である。

中宮がまだ弘徽殿の上の局におられたころ。その御簾の前で殿上人たちが昼間からずっと楽器の演奏を楽しんでいたことがあった。日が暮れたので、まだ格子をおろさぬうちに中宮の御前に灯火を差し出したために、御簾越しに殿上人たちのいる方から中宮の姿が丸見えという状態になるとした。それを察した中宮は抱

えていた琵琶を膝の上に立ててその転手(てんじゆ)の頭部にある弦を巻く部分の陰に顔を隠したという。いらぬ解説をしておくと、これは白居易の「琵琶行」の一節をふまえている。「なほ琵琶を抱いて半ばは面を遮る」がそれ。中宮がとっさに機転をきかしたもので、慌ててタバタと几帳を引き寄せたり、扇で顔を隠すのと比べ、はるかに理知的で風流といえる。たぶん、この場合の中宮の対処の仕方としては衣擦れの音をかすかにさせて、ナメクジのように奥へいざり寄っていくのが普通。それから考えると定子の行為は異端ともいえる身体表現といつてよい。というのも、これでは隠れるのはせいぜい顔の一部だけ。髪や身体つきなどは人目にさらされるままだからである。隠すというよりもむしろ効果的に見せているといつてもいいくらいである。では、どれくらい見えていたのか。「枕草子」にはこうある。長くなるので拙訳で紹介する。

紅のお召し物の、なまじつかな讃辞などとてもおよばない……(すばらしい)ものをたくさんお重ねになつて、たいそう黒々と見事な光沢の出した琵琶にお袖をかけてお持ちになつておられる、その姿でさえもすばらしいのに、その手元のはずれからお額の辺りが抜けるように白く美しく、くつきりと、こぼれて見える御様子といったら、たとえようもな

い美しさである。

中宮の姿はほとんど丸見えといつてよい。御存知とは思いますが、中宮にお仕える女房たちは主人のいる御簾の中には許しがない限り決して入らない。清少納言も含めて女房たちは遠くにいた殿上人とほぼ同じ条件で自分たちの主人を見ていたはずである。こうしたことから考えると、定子の行為は美しい額つきからお召し物の彩りと琵琶の黒漆の光沢までスポットライトを浴びた舞台に立つ俳優のように自分の見られ方を十分に計算し尽くしたものであったといえる。

おまけに白居易の「琵琶行」に読み込まれた女主人公は売春もいとわぬ妓女という賤しい身分。してみると定子は自分を白居易の詩の中の人物を演じるといふ風雅に比して、后という高貴な身を、最も賤しい身分とされた妓女の位置になぞらえるという不穏当さにはまったく意に介していないようである。御簾越しに中宮の姿を見た殿上人の中に、ひよつとしたらこのことに気づいた者がいたかもしれぬ。だが、たぶん、美しい中宮の姿に魂を抜かれて気にもならなかったに違いない。なぜなら、この時のことを伝えた古記録は一切ないのだから。ここで少し本筋から外れるのだが、念のために平安時代の女性の装束について一言。

当時はまず肌に袴を着けた。この段階では上半身には何も身につけていない。

だから、白い小袖を着け、その上から小袖を着込めるように赤い袴を穿いている現代の巫女さんの姿とはまったく違う。下半身は袴、上半身は裸という姿の上に肌着となる単、袿という着物を重ねていくのである。また、女房などを召し使うような上流貴族の女性装束に帯を用いることはない。袴についている「腰」という紐があるだけである。このため男性の強い力で襟首をつかんで引きはがせば、いとも簡単にスルリと着物を脱がすことができた。もちろん急に立つたり急いで歩いたりすれば、胸がはだけ裸身が丸見えということとなる。そのため身分の高い女性は決して立ち上がることはなく、「ゐざる」、つまり膝行して移動した。

これに対して女房は動き回って女主人のために働かねばならない。胸があらわになるのは恥ずかしい上にみつともない。それで彼女たちは着物の上から胴回りを結わえる衣類を身につけた。裳である。そして唐衣という短い衣類をはおった。これが女房装束である。この姿が私たちのよく知る平安時代の女性の装束であり、たぶん、だいぶ以前のことだが藤原紀香も身につけた衣裳である。

大急ぎで話を定子にもどそう。いくらか着込んでいたが、帯というものがないう状態である。琵琶を縦にして持つとなると、どうしても片方の手を上げざるをえない。「アッ」と思う瞬間があったかもしれない、などと想像するのは俗人の発

想に過ぎるか。それにしてもあぶない行為であった。

以上のことから平安朝の宮廷社会に生きていた貴族にとつて定子がいかに型破りの中宮であったか、十分に想像していただけたと思う。

さて、この型破りな中宮に何も悩みがなかったわけではない。父親である関白藤原道隆が生きていたころはともかくも平和であったが、兄の伊周が道長と権力争いに敗れるなど急速に中関白家（藤原道隆に始まる一族をこのようにいう）が没落していったことは定子にはかなり辛いものだったはずである。このことについては後日ふれることにして、今回は天皇家内部の問題に限って紹介したい。

長徳元年（九九五）二月三日、その日はずつと雨であった。夜半、皇太后詮子のもとで雑務を行う判官代の藤原有親が藤原実資のもとをおとずれた。宮中のトラブルの相談にやつて来たのである。

今日、女院の人と宮の人と乱闘の如きことありと云々。前下総守頭盛朝臣曰く、宮のうちに籠り居り、御封を催すの間、其の事に依れりと云々

「小右記」長徳元年二月三日の条

事件の概要は次の通りである。女院の人、つまり一条天皇の母である皇太后詮子の従者と宮の人、つまり定子中宮の従者の間で乱闘騒ぎがあった。原因は詮子の従者が定子の宮（内裏以外にある平安京内の中宮の住居。二条北宮が有名であ

る）に逃げ込んでいた前下総守であった頭盛（何氏であるかは不明）から「御封

（封物。下総国から皇太后への貢ぎ物）」

を取り立てようとしたためであった。定子の宮に逃げ込んだ頭盛は下総守であり「頭盛朝臣」と書かれているので従四位

クラスの中流貴族であり、中関白家の家司（仕えている貴族の家で事務的な仕事や雑用をする人）であったかもしれない。

「御封」は皇族・上級貴族・寺社への給与に等しいものであり、各国の国守（受領）が決められた額を納めなければなら

なかった。おそらく頭盛は皇太后詮子への納入が滞っていたのであろう。「私を無視する行いは断じて許せない。」と怒り心

頭に発した詮子は「手段を選ばず取り立ててきなさい」と従者たちに命じたにち

がいない。「それッ」と従者たちは中宮の宮に押しかけ「頭盛を出せ」と叫ぶうち

に中宮側の従者と衝突したのである。この時代だけでなくずっと以前から都

への官物（税として出されたさまざまな物）の納入はうまくいってなかった。たとえば九世紀に良吏の典型といわれた藤

原保則が備中国の権介（現在の仮副知事）に任命され、五年後その任を離れるまでに三十四年分の租税の滞納を一掃したと

いう。保則の優れた力量もさることながら、前任者までの滞納ぶりがすごい。各地からの租税の滞納がこのように常態化していれば、封主（御封を受け取る人）は「自分への貢ぎ物はちゃんと来ている

のか」とかなりピリピリしていたことだろう。詮子の怒りももつともいえるが、

それにしても定子中宮の宮にまで押しかけさせて乱闘騒ぎまで起こしたのはすごい。ある歴史家は詮子と定子の間のトラ

ブルを「天皇制史上、最大の嫁姑問題」といつているが、この二人の関係はかなり悪かったことが、この事件からもうかがえる。

夫である円融天皇と不仲であった詮子が自分の愛情を息子である一条天皇に注

ぎ続けたのは無理からぬこと。また息子がかわいければこそ「国母専朝（天皇の母が政治を好きなようにする）」といわれる

くらい政治のことにも首を突っ込んだ。しかし、息子の一条天皇は機知あふれる

定子を愛し二人はいよいよ仲むつまじい。おまけに後宮の中での定子のサロンの賑

やかさと評判の高さとはいちだんと詮子の痛に障ったことだろう。

新しい文化をつくらうとした定子だが、後宮内の状況は嫁姑という関係からいつでも決して居心地の良いものではなかったのである。

【補足】

◇ 「香炉峰の雪」の漢詩のこと

実は「香炉峰の雪」の場面で清少納言は大きなミスをしている。その原因は白居易の詩に対する理解である。この章段でひかれている白居易の詩句は「香炉峰下に新たに山居を卜して草堂初めて成

り、たまたま東の壁に題する五首」の一首にある句「香炉峰の雪は、簾を撥げて看る」である。当時、よく朗詠された詩句で女房たちの頭にもこれはすんなりと浮かんだことだろう。しかし、この詩は「閑居」を樂しむと言つてはいる

が、彼が田舎に左遷されていたときのもの。「閑居」といつても当然のことながら、それは韜晦であり、実は今の暮ら

しに強い不満を抱き、香炉峰の雪の鑑賞なんぞはさっさと切り上げて長安に一日も早く戻りたいという思いこそが真

意であったと白居易の専門家は言う。その理解に立てば定子自身が言い出した

ではあるが、清少納言の動きは定子に対して失礼な対応になりかねないものであったといえる。それに対して笑つてこ

たえている定子。筆者ならずとも「オイオイ」とツツコミを入れたくなるではないか。

しかし、それを言つてはおしまいなのだが、定子や清少納言がこの詩の真意を十分に理解していたかどうか。彼らにと

つてみれば漢詩文の素養とは日常的な生活をとときめかせる知的な飾りであり、それ以上は望んでいない。そもそも当代

随一の教養人であった藤原公任も「和漢朗詠集」を編集したとき「香炉峰の雪」を「山家」の部に分類しており、山居の

風流を樂しむ詩としておろ。おそらく公任であれば詩の真意を十分に理解していたであろうが、「ま、いいか」と周囲

の状況に妥協したかもしれない。それはともかく、ここら辺りが当時の教養人の知

的なレベルであり、定子も清少納言もその範囲内にいたにすぎない。二人とも専門的な漢学者でもないのであって、コミ

ュニケーションのツールとして漢詩文の素養を利用していただけのこと。漢詩文の理解の正しさと深さが問題ではなく、むしろ一定の範囲であれ和歌や漢詩文の教養を共有し、それをベースにして日常生活の場において風雅をより高め、そして、よりエスプリに満ちた宮廷文化を構築していくことを定子とその周辺の女房たちは目指していたのではないか。「枕草子」に書かれている定子のサロンのようすを見ると筆者はそう考えたくなる。

◇ 円融天皇と詮子

詮子は関白であった藤原兼家の娘で道長の同母姉にあたる。貞元三年（九七八）八月、円融天皇の女御となり、史上初の女院（東三条院）になった女性であり、天元三年（九八〇）六月、詮子は円融帝のただ一人の皇子（懐仁親王、後の一条天皇）を生んだ。

とはいえ、円融天皇と詮子の仲はうまくいっているとはいかなかった。岳父である兼家との関係が最悪であったのである。兼家は権力欲むき出しで、手段を選ばない強引な人物で、何かにつけ天皇に嫌がらせをしたらしい。また、円融天皇の方でもただ一人の親王である懐仁親王を産んだ詮子をさしおいて前関白の頼忠の娘である遵子（皇后）とした。誇り高く、勝ち気な詮子は深く傷つき、懐仁親王を抱え込んで天皇に会わせない

逆襲に出た。このことにより詮子はいよいよ夫から愛されぬ妻となったのである。

永観二年（九八四）八月、円融天皇はまた二十六歳だったにもかかわらず、甥の花山天皇に譲位した。兼家の嫌がらせに耐えかねての退位だったといわれる。

その後、兼家の陰謀により花山天皇が出家して退位すると懐仁親王が即位し一条天皇となった。すると詮子は国母となり発言権は強まって朝廷の人事などにも口出しするようになる。一方、長年手元で育てた一人息子の一条天皇だったが、次第に母親を遠ざけるようになった。子離れできない母親の干渉に耐えきれなかったからだろうか。一条天皇が中宮定子を寵愛すると、夫から愛されなかった詮子は激しく嫉妬し、定子をひどく嫌った。そうなると思つたことだろう。長保三年（一〇〇一）十二月二十二日、定子の死のほぼ一年後に詮子は崩御した。四十歳の死であった。母親の訃報を聞いた一条天皇からは何の言葉もなかったという話もあるが、真偽のほどは確認できていない。

◇ おわび

前号の「補足」で「今昔物語」巻二十五を「源頼信朝臣、清原□□を罰たしむる語、第八」としたのは、「源頼親朝臣、清原□□を罰たしむる語、第八」の誤りでした。入力ミスとはいえ申し訳ない。

我がおくのほそ道の旅(9)

成瀬 和之

卯の花山（源氏山）・俱利伽羅峠を超えて、金沢に着いたのは七月十五日（陽暦八月十九日）である。ちょうど金沢に仕事で来ていた大坂（明治以降「大阪」）の商人、何処（か）しよ、芭蕉門下）と同じ宿に泊まることになった。

金沢の一笑という人物は、俳諧の道に熱心だという評判が、いつとはなしに広まり、世間で知られた俳人だった。ところが、去年の冬、若死にしてしまったとのことで、私の来訪を機会に、彼の兄が追善供養の句会を開いたので、次の追悼句を墓前にささげた。

塚も動けわが泣く声は秋の風
（墓よ、私の悲嘆にこたえて動いてくれ。この寂しい秋風は私の泣く声だ。）

「おくのほそ道」全巻角川ソフィア文庫
ビギナーズ・クラシックス日本の古典

一笑は金沢の俳人で、その句を芭蕉もおもしろいと思っていたのか、今回の旅ではじめて会うのをたのしみに行っていたようです。ところが前年冬、わずかに三六歳で亡くなっていたのです。

芭蕉と曾良が加賀（石川県）の金沢に入ったのは旧暦七月十五日のお盆でした。そこで一笑の初盆の法要に招かれた。ふつう人の別れはまず出合いがあつて次に

分かれるのですが、一笑とは出会ってもないうちに分かれていた、別れともいえないあつけない別れでした。

芭蕉が一笑の墓前にささげた「塚も動け」の句は慟哭の一句です。この「塚も動け」は芭蕉の激情とまり心の世界、「我泣声は秋の風」私の泣き声はまるで秋風のようにだという現実の描写です。これも古池型の句です。

芭蕉の肺腑から絞り出された痛恨の叫び声に、秋風は同調したというのです。宇宙の遍歴のあと、前回の遊女との別れ、一笑との別れと別れが続きます。寄り道になりますが、金沢の少し北に、

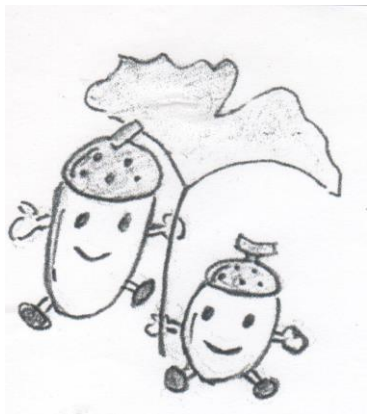
かほく市があります。反戦川柳作家鶴彬は、かほく市高松で生まれました。一九二五年に治安維持法が制定され、一九二八年には治安維持法の死刑法への改悪に反対した山本宣治が右翼に殺される。一九三三年特高警察の拷問を小説で暴露した小林多喜二が特高に拷問で虐殺される。そうなつてくると、「物言えば唇寒し」という、誰もが沈黙を余儀なくされる時代が来ます。一九三七年日中戦争の開始の年に鶴彬は「万歳とあげて行った手を大陸へおいてきた」手と足をもいだ丸太にしてかへし」「胎内の動き知るころ骨（こつ）がつき」と反戦川柳を詠みました。

最後の川柳を掲載した『川柳人』二八一号は発禁となり、鶴彬は治安維持法に問われ、一九三八年、小林多喜二と同じ二十九歳の若さで、最後まで反戦の筋を通

して死んできました。絶筆となった「胎内の動き知るころ骨がつき」の句がかほく市高松の浄専寺に建てられています。

戦争で子は父を失い母は夫を失うという戦争をめぐりに突いた句です。映画監督の神山征二郎の書で、二〇〇九年三月の除幕式には作家の澤地久枝さんも参加し、「非国民として」故郷に決して受け入れられなかっただろう鶴が百年の月日を経て戻り、喜んでいるのではないかと挨拶しました。なお、大阪城公園の陸軍刑務所跡(豊国神社の左横)にも鶴彬の「暁を抱いて(いだいて)闇にゐる蕾」の句碑が立てられています。鶴彬は亡くなりましたが、その反戦の志は、人々の心に今も生きています。

参考図書：NHKテキスト「おくのほそ道」(長谷川權)



米国紀行(9)

河原林 成行

時間がないのと安く上げようというのでしようか、スタテン島との往復フェリーを利用して甲板から拝まして頂くとういのです。女神像のある島へ行けば、右手に持っているトーチのところまで登れるのですが、今回は、フェリーからのご挨拶のみで失礼することにしました。ちなみに、このフェリーは、マンハッタン島とスタテン島のシャトル・フェリーのため、方向転換を不要にするために、その造りが前後左右対称形となっていました。

五月の晴天とはいえ海上は少々肌寒く、寒がり屋の妻は、あのボルチモアでレフコビッツ夫妻がくれたスカーフを着用させてもらっています。彼らはここまで読んでいたのでしょうか? そう言えば、夫人が「ニューヨークではどこへ行くの?」と聞いてくれた時に、「特に決めてないけど、例えば自由の女神とか」と答えた時、ご主人が「あそこは今でも少々寒いよ」と言っていたのを思い出しました。それはともかく、近くで見る女神像は、銅(ブロンズ)の酸化が激しく、汚れて傷んでいました。ミロのビーナスのよくな汚れなき美人を想像していましたが、現実は…でした。でもあれでは、「近々になんとかしなければ」と思うのは私だけでしょうか。

このブロンズ像を贈ったのはフランスであることはよく知られています。作った人の一人がああのエツフェルであることは知りませんでした。これにはビックリしました。当時は、彼にとつては非常にいい時代だったのだろうと想像されます。どのような人だったのかチョット興味を持ちだしています。

ところで、三択クイズです。女神が右手に持っているのはトーチ、では左手に持っているのは、①独立宣言書、②聖書、③合衆国憲法のうちどれでしょうか? ヨモヤ…。

昼食は「ニューヨーク警察」の近くの中華街(The China Town)で広東風中華料理を食べました。「北京ダックも如何ですか。ビール付きですよ」とのことでしたが、「また今度」にしました。食べ物屋サンはどこも大変な賑わい、繁盛ぶりでした。

昼食後は、よくこんな所からの情報が世界を動かすものだと思うほどに、本当にせせこましい通りにあるウォール街を、うんとスピードを落として走ってくれるバスから覗かせて頂きました。本当になんの変哲もない、狭くて一方通行の多いニューヨークの中でも特に狭く、バス一台がやっと通れる小さな路地裏です。黒猫が横切ったら似合いそうです。

このウォール街からの情報だけに限らず、このマンハッタン島からの情報は、それが「ニューヨーク発である」という理由

だけで、極端に言えば、どの地区からのどんな情報であるか、という内容にはお構いなしに瞬時に世界を駆け巡り、世界を動かすのです。現代の世界の構造がそうになっていると言ってもハズレではないと思います。

次に行った「United Nations (UN)」もその典型の一つです。今でこそ世界に、この地球自体が破壊されかねないような大きな緊張がないものの、我々の少年青年時代の米中ソの冷戦構造の世にあつては、UNが唯一「頼りになる(信頼できる)」情報の発信源だったので。

当時の事務総長は、忘れもしないハマーショルド(Mr.Hammarshold)でした。彼は、UNの役割とそのために自分しなければならないことをよく理解し、職務を遂行していきました。必然的にUNの存在価値も高めました。大袈裟に言えば、この地球が「猿の惑星」になつてしまふまでに、世界は彼によって何度救われたか知れません。

F.Kennedy とともに、不肖、私の原点となる人物の一人です。

そこへ今、足を踏み入れるのです。何ともいえない畏敬の念を感じ、安堵感も感じるとともに、現在も「安保理」やユニセフなどでこの星がお世話になっていることへの感謝の念を強く感じました。

今では、緊急の会議や特別なものの以外は、我々のような通りすがりの一見さん観光客でも会議を傍聴できるそうです。

少々待ち時間は要るようですが。それだけオープンになってきているのでしょうか。でもやはり、所要場所のガードはシッカリしていて、UNらしさがありました。急に話は小さくなりますが、感謝を込めて、Tシャツ三枚とキーホルダー三個を買いました。うち四十五パーセントは、ユニセフの基金へ寄付されるんだそうです。

今日(十月二十六日)もそのTシャツを着た、八才になったばかりの亮介と稲刈りの済んだ、家の前の田んぼでキャッチボールをしました。

ニューヨークには教会も多くあるのですが、どれも大きなものばかりです。中でも、ミッドタウンのど真ん中にあるセント・パトリック教会は、かなり高い確度でこの教会からローマ法王が生まれる可能性のあるカトリック教会で、百年経った今も工事中ということです。

薄暗い中でステンドグラスだけが美しい光を放つ、何物をも包み込んでしまいそうなゴツツイ空間を多少の違和感を持って眺めていました。それにしても、いつ完成するんやろ？

ハーレム(Harlem)は、バスからの説明だけで、降りて見物するようなことはありませんでした。よく事情を知った案内人と一緒なら面白いトコロもあるそうで、もう少しツツコミたかったのですが、よく分かりませんでした。

ただ、我々には想像できない、予断を

許さない、この国の難問の一つを象徴的に抱え込んだトコロでもあることは確かのようにです。

日本の宝塚のような華やかな雰囲気メトロポリタン美術館を最後に、バスは五番街(5th Ave.)を通過して、元の The Hilton & Towers へ十六時三十分、無事帰還しました。

途中、泊り客の多い順に国旗を左から玄関に掲げるといふ派手なパフォーマンスをしている有名なホテルがセントラル・パークの近くにありました。その日は、アメリカ、イギリス、日本、…の順であったように記憶しています。それにしても、この国の人は「旗」が好きですね。

タイムズ・スクエア (Times Square)、マディソン・スクエア・ガーデン (Madison Square Garden)、ラジオシティ (Radio City) やコロンビア大学 (Columbia University) なども通りましたが、何せこのマンハッタン島そのものがそっくりそのまま全部有名な場所です。埋め尽くされていますので、一日やそこらでは見物し切れないのは勿論、観光バスで通った所でさえ書き切れません。あまりにも多くではありませんが、「また今度」にとっておきます。

到着時間も早かったので、お世話になったガイドさんに聞きました。「子供のおもちゃやお土産を買いたいんだけど、どこにありますか？」。

翻訳の言葉

大江 雉鬼

『複製技術時代の芸術』という本がある。ドイツのヴァルター・ベンヤミンによる一九三六年の著述である。著作権のことやコピー全盛の風潮のことなど、あれこれ考えていた時に参考になりそうな文章がないか探していたところ、この本がヒットしてきたのだが、読み始めるとどうも感触が違っている。もとより文章が難解ということもあるのだが「複製」という語の自身が、私の思っているコピーとは違う気配なのである。それに気づかずにはばらく読み進めていて、ピントが合わないもどかしさに戸惑っていたが、ベンヤミンの言うところの複製が、現代社会で一般的に言われるところのコピーではないということに気づくや、少しは読み進められるようになった。

私がイメージしていたものは、絵画であれば画家がキャンバスに描いたオリジナルを写真に撮影して印刷したものであり、音楽であればスタジオやホールでの演奏を録音したもの、あるいはそれをさらにダビングして新たに作り出されたものである。一方、ベンヤミンのいう複製とは、原則的に一回性において特徴づけられる芸術が技術的な意味での大量生産が可能になった段階で生み出されるものを指している。すなわち活版印刷による書籍であったり、カメラによって切り取

られた後に現像されて大量に流布する写真や映画である。

私が持っていたイメージとのギャップが顕著になるのは、たとえば文章についてだろうか。ベンヤミンによれば印刷された書籍は複製技術によって生産されたものである。そこから推測するに、複製技術を用いていないものというと、作家が手づから書き留めた文章、いわゆる直筆原稿のことである。それに対して私の思い描いているところはこうである。原稿であれ書籍であれ、オリジナルとされるものが一次的に存在しており、それと同等のものを二次的に作成したものがコピーである。そこにはオリジナルの書籍をコピー機にかけたものもあれば、写真で撮影したものもあるだろうし、あるいは文字を手書きで書き写したものも含まれる。

鬱陶しいご託が重なってしまいそうな雲行きなのだが、今回のテーマを前もって言うておくと、ベンヤミンの本を「複製技術」という言葉で表すことに対する違和感であり、翻訳語のいい加減さ、そう言うて語弊があるならその是非についてである。ベンヤミンの原文で用いられているのは、Reproduzierbarkeit (独) という単語である。ドイツ語は分からないので何も言えないが、訳者はこの言葉が日本語の「複製(技術)」に相当すると考えたのだろう。しかし、語源や語法的なところが絡むのならともかく、ベンヤ

埋め草

かなり以前の話になるが、こんな話を聞いたことがある。なんでも人類のほとんどの民族は「虫の声」を認識しないのだとか。詳しくいうと、脳科学の分野における研究成果らしく、虫が出す音に対する処理が、日本人とポリネシア人は左脳で行われるのに対して、他の大多数の民族は右脳で行われているという話である。左脳が言語や論理などの知的活動を司り、右脳が感覚を司るところから、虫の出す音を左脳で捉える日本人とポリネシア人はそれを「声」と聞き分け、他の民族は「雑音」と受け取るのだそうだ。そこから、日本人が繊細に聞き分けるさまざまな虫の声であっても、外国人には聞こえないという現象が起きるのだという。これは、外国人の場合、虫の発する音が音量的に不快とならない限りは意識の領域に上がってこない、すなわち認識できないということなのだそうだ。

さらに興味深いのは、虫の音を左脳で処理するのは人種によって先天的にもたらされる生理現象ではなく、日本語を習得する過程で培われるという点である。したがって、父母が日本人でなくても幼い頃から日本で生活して日本語を生活言語として使っていると、虫の出す音を「声」と認識し、微妙な違いを聞き分けるようになるらしい。このことは逆もまた然り、日本人の父母から生まれた子ども

でも英語等の欧米語を生活言語として育つと、虫の声に対する認識力は養われないのだそうだ。

この話を初めて聞いた段階では日本文化の繊細さを非常に誇らしく思ったものである。しかし、言語の違いが生理現象に現れるということは、視点を少し変えれば、それぞれの言語には異なった得意分野があるという話になる。つまり、虫の声だけを取り上げて繊細さを強調するのは、事象の片面だけを喧伝する独りよがりすぎないということである。欧米系の言語は、虫の声を認識する点では劣っているかも知れないが、日本語が苦手とする特長が何かあるはずである。たとえば、主語を明示することによって常に動作主体をはっきりさせる点などは、その一つだろう。

今回の文章では、ここまで「私」という一人称を示す単語は一度も使っていない。虫の声云々については、私はこう考えているという趣旨で書き進めているのだが、あえて「私が思うには」とか「私は考えている」とか書かずとも通じるからである。これを仮に英語で書くとしたら、一文ごとに主語を添えていかねばならない。このことは、欧米系の言語は動作主体を明確するという点に特長があり、そのことは個々の覚醒を促し、個人の責任意識を醸成することに秀でていると評価することができる。

アメリカ合衆国が訴訟大国であるのは

よく指摘されることである。日本に紹介される事例は、ネコを電子レンジで乾かそうとしたら死んでしまった、キャビネットにネコを入れるなど製品マニュアルに書いていなかったからメーカーの責任を問うといった類いのものが多く、どちらかといえば茶化されがちなのだが、訴訟が頻発するのは、些細なことを含めて、あらゆる事象に対して責任意識が先鋭な文化であることの証しである。なに「こと」も全体のせいといった形でうやむやにしたり、不都合なことを一人で抱え込むことに美德を見いだしたりすることはあり得ない。和を以て貴しとする日本人にすれば、文化的あるいは歴史的な土壌が違わずいて笑い話になる部分だけをつまみ食いしてしまうのだが、事象に対する責任意識が発達しているがゆえにもたらされた成果も多い。

確かに、些細なことを取り上げて、こと細かに責任を問うのが標準になると雰囲気ガシガシしてしまうのは事実だろう。だが、それも鏡の背面のようなものであり、責任意識の伸張がもたらすところのメリットとデメリットである。虫の声を繊細に聞き分ける日本人のケースにしても、聞き分けることができるばかりに、西洋人なら煩いようなない神経症に悩む可能性があるかも知れない。だとすれば、それは麗しく繊細な感性にも、背面が存在していることを意味している。

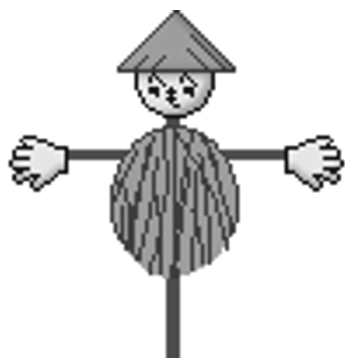
(C)

編集後記

一気に秋めいてくる気配を感じます。この夏は、思い切り大峰奥駈道を楽しんできました。七月と八月に二度行きました。電車で行くところですが、車で行けば、割と簡単に行けます。二度とも雨が降らず天気に恵まれました。

奥駈けの魅力は、山の奥深さ雰囲気にあります。高さこそありませんが、奥深い山々は、修験道の聖地といわれるだけのこととはあります。歩いてみると、地図上で想像する以上に遠く、登り下りが続きます。来年は、吉野から本宮まで縦走したいと考えていますが、体力が問題です。

(嘉)



まだ大丈夫か

熊本のみんなが親戚のようなもの、と地元愛を口にして、元気で唄う八代亜紀さん。近くに住む義妹を思い出して便りをすれば、「元氣や」たった一言。

自分では、まったく気づかず、周囲を暗くするような部分を持ち合わせているのだ。なんだろう。弟妹も多く、いろいろだけど。根っこから暗い性格の人ってのはいないのにな。

地元、八代の名を芸名にした彼女は、今回の地震は人一倍つらかったと思う。福島原発事故、次々起こる地震、その苦しみを思い、何度か泣きながら歌い、励ましていられる姿を画面を通じて見ている。

「心の中で東北の悲劇、熊本の地震が重なった」という。笑顔で元気に唄う一方で、「哀歌」は人々の心の奥底に響いてゆく。

「舟歌」「雨の慕情」など、数々のヒットがある中で、八代さんにとって「心をつなぐ十円玉」という曲が最も記憶に残るといふ。

卒業式直前に「苦しい時は電話しろ」と先生がくれた十円ひとつに思いがあり、前を向き人生を歩む宝物

になった。

現地は今も、余震がつづくと同時に不安がたえない。こんな時こそ、心に響く歌を

「明日はきつと来る」
義妹よ、もつと明るくなれと言いた

い。

夕食のおかず何だったかなア…。
こんな事があつたけど、という。覚えていない。

「何月何日に会えるか」そんな先のこととは約束できない。何もかも老化のせいと諦めていいのだろうか。

テレビでは首相側近が「記憶がない」「言った記憶もない、従って言っていない」首相からの指示の有無を問われ、首相補佐官は、しれっと言った。

記録もない、ナイナイづくしでどう納得しろというのか。

国家のお偉いさんは嫌なことは忘れる。「そんな昔のことは覚えていない」といふ。

おエライさん、しっかりしてよ。
日本の国、そんな事いってる人に任せられないよ。バアさんのぼやきから。

まだ大丈夫か

「今の若い人は勝手だ」といえば、すぐ反発を買う。

でも、こういう意味の言葉は、古代の遺跡にも記されていると聞く。

世代が違えば、考え方や行動が違って当然。その時の世代や環境によって同じ世代であっても、一人一人みな違うと理解して怒らないようにしているのだが。

フンフンと聞きながら話題を提示するのも一つの方法。はやい話が自分の子供、孫との会話でもだいぶ喰い違いが起きてくるもの。

若い世代に迎合する必要もないけど聞く耳を持つことも大切。

人生の終わりを、よりよくするために事前に準備出来ればよし、断捨離にふみきれないのを苦虫をかみつぶしているのは誰。

想像してみてください。



俳句

土田 裕

ため息が
癖となりたる残暑かな

坂の上ここにも空き家白木槿

駒草やロープ一本柵として

余生また

かくなるものか五里夢中

妻と居て秋の雨降る寡黙かな

影山武司

青柿の青深めゆく雨滴

万緑や幼子の笑み力とす

雨上がりの光受けとめ花南瓜

雨上がり空青々と立葵

青嵐鎮守の森を掃き清む

蓮の葉の空を封ずる玉雫

茅の輪くぐり

よきことあるを願いけり